

『キリスト教信仰における不屈の情熱』

— 1774上演のベネディクト会演劇—(続Ⅱ)—

Der standhafte Eifer im Khristenthume – Benediktiner-Bühne
Salzburg 1774 (Folge Ⅱ)

嶋田宏司 (Hiroshi Shimada)
Detlev Schauwecker

Nach Abdruck von Aufzug I und II des Salzburger Japandramas in der Vorjahrnummer dieser Zeitschrift wird der Schlußteil des Ordens-Schuldramas und sein Prolog im Original¹ und in japanischer Version, von Hiroshi Shimada übersetzt, abgebildet; der Prolog ist eine Dedikation, die der Stückheld Ukondono zu Aufführungsbeginn – in barockzeitlicher und damals nicht seltener Manier: aus einer Wolke heraus – an den jüngst gekürten Salzburger Erzbischof, Fürst Hieronymus von Colledredo, richtete.

In Folge I hatte ich im Nachwort angesprochen

– den historischen (japanischen) Hintergrund, den der Stückautor aufgegriffen hatte,

– den im Stück reflektierten politischen Hintergrund im Erzbistum Salzburg der frühen 1770er Jahre.

Eine dritte Komponente in dem religiösen Erbauungsgenre sind die Zwischenspiele: Pantomime/Allegorie, Instrumental- und Chormusik. Verschiedenartige Psalterzitate des Chors sind vorliegendem Stück zugrunde gelegt und damit auch seiner inhaltlichen Auflösung nach einer alttestamentarischen Vorlage hin: Zwei Chorwerke drücken in einer Steigerung die Freude des Volks Israel aus, nach leidvollen ägyptischen Tagen zum Gott-verheißenen Land Kanaan aufzubrechen, eine vertraute

1 Nach Vorlage des Druckexemplars der Salzburger Universitätsbibliotheks, siehe ferner Folge I.

Metapher für frohe Todesbereitschaft. Die Metapher meint im Stück eine Martyriumsvorbereitung und kommt durch Michael Haydns Musik im Peregrinus-Satz wunderbar zum Ausdruck. Zudem scheint über die Assoziation Ägypten in der Beziehung Ukondono-Shogunsama das Verhältnis Jakob-Pharao aufzuklingen². Der Autor schien in dieser alttestamentarischen Referenz das Bild eines hochherzigen (orientalischen/ostindischen) Shoguns gezeichnet zu haben (das nun einem aufgeklärten Herrscherideal entgegenkam, wie dies in jenen Jahrzehnten wiederholt in einem außereuropäischen Bühnenhelden entworfen wurde³).

Folge III (voraussichtlich im Folgeheft, 2006, dieser Zeitschrift) wird die drei Komponenten ausführlicher erörtern.

2 Ich danke Pater Petrus Eder, Benediktinerstift St. Peter, Salzburg, für den Hinweis auf die Möglichkeit dieses Bezugs.

3 Bereits in der lateinischen Fassung von 1770 war hier im Sinn aufgeklärter Toleranz – und ich korrigiere meine entsprechende Bemerkung im Vorheft – Mitregentschaft („Mecum rege“) des christlichen Herrschers und seine Unterordnung unter den andersgläubigen („Secundus a me Dominus“) angesprochen.

『キリスト教信仰における不屈の情熱』
1774上演のベネディクト会演劇の正本とプロローグ
(「ティトスの口上」) 翻訳 (続Ⅱ)

第三幕^(a)

ティトス・ウコンドンに向けられたるあからさまな憎悪。

第一場

ショウグンサマ、シャルンガ、ゴモルドン。

シャル：わが訴へを、お聞きいれ給へ。かの不敵なる罪当たりめを誅し、かの法、信心、神祖たちのため、復讐を遂げ給へ。毒がこれ以上、広がらぬよう、ぐずぐずしてはなりません。

ショウグ：わしの手で、わしを救いに参った男を、懲ぜねばならぬのか。わが弟を打ち据え、奴めが一揆を鎮めけり。わがために、獅子のごと忠義にして、優に勝ち戦を得ん。

勝利が最も良き友となした、この精兵。彼が気高き胸からは、混じりなき無実の声が笑ひ出す。これなる男を懲らしめよ、と申すか。これではあまりにも望むところ多し。

シャル：あまりに多くを、とおほせ給ふや。一しかし、よりはなはだしきは奴が教への誤り。げに、奴めは神祖たちを嘲りおった。かように寛大にしておるなぞ破壊の因。キリスト信者が何妨げられることなく、義も御法も信教をも汚し、彼が計りごと、狂いの沙汰が成就するよう人を目くらましさせるのを黙して見ておるなど。もしや奴が、国の教えと神祖をおとしめ、すべて祖国の進みを滅びへとねじまげようというのなら、かような男をそなた様は罪無き、と呼ばわり給ふや。

ショウグ：あれは、わしに常々忠義を尽くした。これは打ち明けません。

シャル：さにあらず。奴は律令にも、神祖にも、またそなた様にもわれにも忠義ならず。御位が御身に請ふるは、神祖たちに仕へ、その教へ、神様の霊地、また釈迦の法力など、天から下されし信教の光明を、あやまてる教へによりて曇らせず、また奪いとられなどせぬよう、榮譽を保ち、より高くに押しあぐこと。神さぶものは出で給ひ、これより地にそなた様の王位を守り給ふ、幸福、無事、恵みが流れ来む。

(a) 庭園にて。

そなた様はもしや、よそ人が嘲り笑ひても、黙したまま、墜落をたすくばかりの悪道を、御自ら広げ給ふおつもりか。人おのがじし、無分別にあらたしき神たちの姿を刻みても、そなた様は世の乱る筋を引き給ふか。御身の無事を保つよう、とくと分別したまへ。そなたが国が、よく調り侍ること、望み給ふならば、こたびこそ悪しきものを、打ち調じたまへ。いたづらに時過ごされますな。このもの深き根を張りて、大和の国が手づからこれを絶やすも、かなわぬほどに成らぬよう。

さても、この病にかかりしは、かのつはもの。キリストの教えを好んでおり。大將ひとたびめくはせば、彼が眼を覚まし、勇みて今日にも命を捨てむと、歩みいださん。

その名においてわれが今忠言申せし、なにとぞよき正義にかなうことを為し給へ。大和し国のまことの律法を助け給へ。これなる禍事を絶つるは、帝が国の安寧と神祖たちの誉れを求む。これこそはそなた様の榮へ、おん身の命を欲すこと。さもなくば、高御座、憤怒の片に捨つるもありうべき。御法を守り給へ。さもなくば、信教も地に墮ちん。されば、氏神を罵るなど、血をもて復讐されるべき。

ショウグ：(いか様にてやあらむ。わしはこの通りに為すべきか。して、あの男を誅すべきか。わが心の支えであるものを。わが救い手を憎めと申すか。)

そなたが求むるは、あまりに多い。そなたがかような男をいたく咎むれど、彼が忠義はわれには憎げに思はれぬ。より軽き手だてを打つとなれば、いかに。

シャル：より軽き手だてとは、いかなるもの。

ショウグ：ティトスが気高き魂、よき心榮え、彼がなしたる忠孝はわしには周知のこと。なごはし口付きには耳を傾けようて。わしは贈り物と言葉をもて、あの者を承服せむ、と思ふ。

シャル：そのいづれも、そなた様にはなし給はじと、おぼす。物もて懐柔し、または謹(せ)めるとも、気高き男は笑ひぬべし。もし、人なまかな手だてで、悪を断ちうべくんば、手だてをきはむべし。

ショウグ：ならぬことじゃ。神祖たちすら、かくも手荒ではおわすまじ。雷光に打ちすへと、重ねて落すなど。ただかすかな物音で、氏神たちの怒り、命限りある者に告げ給ふまで。

よしティトスが帝の口添えに、心を変へぬとあらば、世はシャルンガの忠言に、かなうよういたさむ。

シャル：それでようございましょう。御身の御運を試され給へ。忠言を重宝に思し召し給へ。して、奴を謹めるとも、ティトスが荒まし心、頑なしき心ばへ、これ破れまじくば、御帝、仇討ちにかかり御自らの約に思ひいたらせ給へ。されば、血をも

『キリスト教信仰における不屈の情熱』

て神祖たちのこれなる恥を激し給へ。

ショウグ：ゴモルドンはいづこ。

ゴモル：いと高き主に御帝畏くも、これなる隨身に、何の命や仰せられるのでしょうか。

ショウグ：そちが行きて、ティトスを参らせよ。

ゴモル：おそれながら申し上げます。あれなる者を呼ばわるには、時過ぎてやあらむ。それがし耳にすに、あれなる男が総大将の許に参った由。

ショウグ：そはいかにぞや。

ゴモル：かの武士たちの荒まし太刀。キリストのため、あまねく坊主どもに向て戦の用意なされてあり。これを止むるべく。

シャル：氏神の方々。いかなる悪業なりや。御身はこれな過ち這い渡る様御覧ずや。げにおん身に逆ひ天の神の酬ひ引き出したるほど。

ショウグ：(ティトス押しひしぐ禍ひやいかに。) 事の因を検見すよう、つとむべし。して、わしのもとにウコンドンを呼びてまいれ^(a)。

シャル：わが坊主どもを戦の太刀がのがさずとあらば、われはティトスが血を代に申し受けたし。

ショウグ：いかにぞ、ティトスの血か。あまりに事を急ぐまじ。坊主たち、この期にあっては、武士たちと並みて罪もありうべき。行ひすべてにわたり、判官の義理により、判下るべし。

第二場

モロドン、イエモンドン、前出の者たち。

モロド：これは、おん帝に申し上げます。かのもののふ増長しつあり。そは高名がみずからを、誇らせたり。彼が鎮守の森、仏閣にて、国人と同じに捧げ物すべきとき、この務めを拒み、神祖たちを悪しざまにいひて、かくののめきぬ。ティトスが天主のみ正しき。かつはわれらが国の神たちより、はるかに勝る。勝利は全く、これなる天主の御手より来り。われは氏神たちに負ふものなし。いやさにあらず、われはただティトスが天主に感謝すべき、と。

シャル：とくにご覧じ召され。この悪疫が武士たちにより、いかさま広まりしかを。

(a) ゴモルドン去る。

ショウグ：さらに何ぞ起こりしか。

モロド：坊主どもの唱和す声、言ひ争ひ、せき立てていふに、その武士、神祖たちに香を焚かれよ、と。しかし、全てが無駄事なり。もののふども応ふるに。いな、と。奴輩、太刀に手をかけて、国の全ての神たちを罵りてけり。甚だしき怒りが、これなる信教のそしりをさらにあおりましよう。このものども、ウコンドンが神に背くより、どんな苦しみでも求むるが良い、とぞ。さらに、もののふどもと坊主どもの間に沸き出る争ひ事。騒動（さうど）く羽目になりけり。さらに寺院においては、異なる勝事あり。坊主どもの闇ぐ声、武士たちの忿怒の声。

畏くも、御帝に申し上げます。じきこの凶事せきとめられませい。さもなくば高御座も御命も、揺ぎましようぞ。さぶらいめがティトスを玉座にすへ置きかねまじ。

ショウグ：そは、ありまじきこと。かように悪しき事、まずはティトスが考ふやふなし、むしろ一揆を平らぐべく心得けむ。

モロド：ああ、いたはしや。かくばかりは覚しめさるな。あれなる者は、一揆をさらにあふるばかり。

イエモ：畏くも御帝。国が律法、これまでと変わらず皆に守護されまじくば、御身の滝口の武士、ウコンドンおよび彼が無類の輩どもに向かひて罵り、死をもって誓言などしましうぞ。

ショウグ：(はてさて、これなる報せ、とんと腑に落ちぬ。わしにはげにいぶかし。)

シャル：この様、忍び給ふや。さても突然盲ひとなり給ふや。この迫りたる危難、いかばかり甚だしきか、見分き給はぬか。神祖たちの尊厳、御身の軍団に家臣の無事、また御身の上の安泰が、御心動かしませぬや。御座に御法、またお命は主上にとりて金で贖えるものなりや。

イエモ：かの武士申すに、御身はキリスト信仰を窃かに喜びて、げにかくの通り許し給ひけむと覚し召さる、とか。そは……

ショウグ：口を噤むべし。何を語ることやあらむ。わしを守護する北面の者、このわしがティトスが教えに染んだ、と思ゆるか。

イエモ：あまりに深くティトス、また彼奴が御身より賜る寵意、恩寵に身を入れ給ふは、御身の害を進めかねまじ。

ショウグ：よしんばわれを望みが欺き、ティトスが大和し国をおびやかす彼の教えを捨てぬとあらば、かつは信教の卑しくも罵る者として、かつは帝の国の仇討ち、神祖たちの仇として、今なほ地に落つべし。また、彼が、計りごとにより、キリスト信仰

『キリスト教信仰における不屈の情熱』

に引き入れける武士も同道すべし。

シャル：おお、かくも畏きショウグンサマ。栄えを御身に集め給へ。

イエモ：御身が垂れ給ひし範、かならずかの家臣に知らしむるべし。いかさま、疑念に成心があやまてるかと。さすれば、御身の高御座、危難から遠ざけられましよう。

モロド：ひとたびかのもののふ、総大将の青ざめたる様を見出づれば、たちまちキリストを離れ、御国の教えに帰り来ん。

シャル：さても、釈迦の懐にあっては、幸はう御一人御身を見出されましようぞ。

第三場

ヤクイン、前出の者たち。

ショウグ：なにゆえ、ヤクイン、遣使の報せをもたらすに、かくも遅くなりおった。

ヤク：これは、御帝、わが顔には、なにひとつとて良き結果がなかったものと、映ってございましょう。わたくしめは、十分に早く参ったので御座ります。かく申すも、美しき姫君は、もはや御身のために誰一人としておわしませなんだ。

ショウグ：なんと申す、アリマ。かの国は、このショウグンの指図にも下命にも従わず、これを逃げるにしかず、と申すか。

ヤク：市中には衆の集い起こりし。そはそれがしが参り、国の者たち、女の貢ぎの求めを聞き知ったがため。また、気荒き女どもの一団も、集り来りてわれに向ひ罵りなどいたす始末。そは、色好みの殿様が抱くはなはだしき性、かくも悪しき行ひに傾きて、とぞ。者ども難じたて呪ひなどすなり。皆で騒ぎ立てるに、わが子を物なぐさみに出すよりは、汚れなき身で死ぬるがよほどまし、とぞ。

ショウグ：(えい、なんとせむ。これなる辱しめより、大きな辱しめがありうべきや。)

シャル：そなたはキリストの教えの美しき実りを御存じなりや。

ヤク：然り。まさに、これなるは彼の者どもが、いと聖しと名付けし者なり。娘どもも男子どもも、はては男子どものいひたるは、これなる信仰を持ちたる娘なれば、御身によりてもて遊ばるるは、天主に背くもっとも深き罪なり、と。

ショウグ：なんと申した。これが罪なり、と。われらの皇宗が持つところなる権利であるを。たわけたことを申すな、アリマ。これなる不敬は、そちがあがなふべし。身を震ふがよい。わが仕打ちを怖づるがよい。

ヤク：それがしは、難儀の末に、暴徒の怒りより逃れて参りてけり。逃れる中、わが身の無事を望みしが、すべての女どもの勢がそれがしを取り囲みし。われは辛くも、死より逃れて参ったのでござります。彼らが申すに、不逞なるそれがしが娘の幾人かをそそのかし、御身のなぐさみに連れゆかむとした、と。

ショウグ：これはしたり。あの土民ども、地の虫けらである者どもが、不逞にも、意気揚揚わしに刃向かふつもりじゃ。この日輪そのものである、わしに。星辰が知り、最上の友、縁者と呼ぶこのわしに。また、あまねく世が額づき、神たちの一群も、親しく交わりを結ぶこのわしに手向いて、か。

ティトスの教えからは、わしに向いて危難に禍ひの芽が伸び出ずるのか。家臣までが、わしが当然下命として望むものを退け、かつは、悪しとぞ言ひけるなど。払へ、この疫病を払へ。病ひが広がらぬうちに。この教えを狂信して止まぬ者は死すべし。よしんばその者、釈迦の教えに回心するとも。

シャル：これは御身、よくぞ宣まひける。キリストにおとしめられし、誉れも御身に帰りましょうぞ。

ショウグ：シャルンガよ、神祖の最も近しき友よ。坊主の叛徒を押し留むるべし。して、その者どもにウコンドンを討たしめるべからず。そは、われが彼の男を返報の見せしめにと、わがためにも決したゆへ。イエモンドン、これへ。かの武士のところへモロンドンらと参れ。して、かの勝者、新しき計りごとなど胸にも抱ひておらぬか調べて参れ。

モロド：(われに負わされし、この勤めいかに甘き事。)

ショウグ：さても、ヤクイン。ウコンドンに告げるべし。死すべし、と。加ふるに、われはただ一人とも赦免せぬ、と。胎に児を持つ母親も、ともに亡ぶべし。さらに、一刻ののち、わが宣旨は発せられるべし。たとい、あの者が、われにより猶予せられるこの一刻のうちに、彼があやまてる教えより、大和し国の信教に、まことより回心せずとも。あれなるは召し出され、急ぎ来るであろう。われは出でむ。彼参内すなれば。もはや、彼が位階は帝の顔を見ゆるにもしかず。兵衛の大將に告げよ。殿中のわしのもとに参るよう^(a)。

ヤク：御帝御宣旨の通り、事なしとげよう、あひ努めます。

イエモ：御同輩、ヤクイン殿よ。これで、さらなる骨折りにて、御帝の御贖患(しんい)を、いや増して煽ることができましようて。とりわけ貴殿には、御帝は御

(a) 彼はシャルンガとともに退場。

寵意を示されましようし、信を置かれましようぞ^(a)。

ヤク：意気落すでないぞよ。わしは、またもや新しき手を思ひついたぞ。

第四場

ヤクイン、ティトス・ウコンドン、ツミコンドン、ゴモルドン。

ヤク：わしにはいかにも奇異に映るものぞ。ティトスがおのが死を眼の前にして、なほ笑ひてあるは。大きな魂が、彼が位階を榮えさせ、彼が身に映え出ておるわ。

ゴモル：ご同輩。御帝は去り給ひしや。いずくにおわされしか、申されよ。

ヤク：宮中にてやあらむ。

ゴモル：では、取り急ぎてウコンドン殿、われとともに御帝のもとに参ろうぞ。

ヤク：まかりならぬ。総大将よ、留まるべし。さても今しは、御帝の御前にて、そなたの姿を見せてはならぬ。御帝いたく御腹立ちにてあらせらる。去りがてにそれがしにのたまひけるは、そなたに御臆患を語るべし、とぞ。ぐずぐずするなゴモルドンよ、そなたとのみ、御帝は御一人で御面会し給ふ。

ツミコ：さても、つなぐ望みの礎が、すべてここに落ちたるよう。

ゴモル：いかな悪業の舌先が、これなるお怒り目覚めさせける。そはシャルンガか。さても、モロドン恥じなく徳人を計りにかけ、押さへつけしか。

ツミコ：モロドンが苦るような怒り、ねたみてティトスが戦勝を眺めてゐたり。

ヤク：害をなしえたるは、その両者にてはあらじ。天主キリストこそ、ティトスを落しめたり。

ティト：いかにそれがしは、幸せ者であろう。これなる教へがために死に。これなるがために悩むとは。ゴモルドン、われを置いてゆけよかし。さもなくば、御帝が御臆患もそなたに向わずともいえぬ。

ゴモル：わが友輩、そなたが無事はこのわしが、しかと目を開いて守護しようぞ^(b)。

ティト：さても、さてもヤクイン殿、それがしには何事も殿がそなたに命じた件を、お隠しになりませぬよう。

ツミコ：(なんと怖しや。わが肝は、稲妻のごとく髓まで震わせるおののきに、縮み上っておるわい。)

(a) 彼はモロドンとともに去る。

(b) 彼は急ぎ足に去る。

ヤク：これはウコンドン殿、相済まぬこと。わが眼は涙にぬれて、そなたと話しもできぬ。

ティト：左様なことなぞ、男の子ならぬ者どもの弱げな心様にてのこと。そなたは男じゃろうて、なれば気丈に御帝が御心をわれに告げられよ。御帝はわが命を希み給ひしや。

ヤク：やれ、そなたは推し当てられし。されば一刻のみ、御帝はそなたに思ひめぐらす時間を許し給へり。そはそなたが、古来の信教に回心するや否や。かつはそれにより、慈愛、命、幸運、また榮譽を得たしと思ひ給ふや否や、と。

もしやこの一刻が過ぎ、そなたもまた、天主教を離れておらぬのであれば、その時はそなたから妻、男の子達、家人まで、死が耐えがたき苦痛もて、引離してゆかめり。

友輩、それなる教えをすてよ。キリストの信心を離れよ。

ああ、なんとそなたも不憫よのう。

ティト：わが友輩、われにお許し下さらぬか。感謝の徴にそなたの手に口付けさせては下さらぬか。

ヤク：断り申す。それがしは、そのような誉れにしかず。(いかに鋭く、心を揺さぶりて、その声がわが耳に響くことか。)

ティト：いかなわが身に不相応な幸運が、わがために選ばれし事か。おう、心地よき知らせ。すでに血潮もたぎり立ち、わが血管にありて落ちつきなし。心の臓は高鳴りぬ。そは、この喜びに耐えられぬがため。さそく、わが家の者どもに、御帝より給ひしこの善き報せを告げん。

ツミコ：お待ち下され。なにをなさるつもりぞ。気づき召されぬか。そなたと共に、息子達、娘達、われも家人も、道連れ給いひしか。

ティト：罰は他の者に及ばず。キリスト信者のみ死すべき。何を見て震えておられる。不信心のゆへか。行きて参れ。して、御帝に、それがしに代わり、御手に口付けを奉りてくだされ。わが腰元より太刀を抜き、携えられよ。そは御帝がため、弟君の反発するごと荒まし魂を、胸より追いやったもの。この両の肩の荷とならざらむばかりの胸飾りを取り、御帝の御足につけそなはせられよ。必ずや、その戦の業にかけて大将となる、ひとりの廷吏を見つけられようぞ。それがしは長きにわたり存分にこの大任を担つてまいった。されば、伝えよ。この榮譽の飾り、ティトスとはもはや身につけることはならじ。天主の教えがため、生き身の命を投げ打つ覚悟とあらば。

やや、ひさしく待ちこがれし刻がようよう明けよう。わが放たれし魂が天主のみもとに舞ひ昇るように。わしは、そたなにこの世にこの飾り、そたなの大和し国を渡し

てゆかん。このわれには血腥ひ死が、われには受苦こそ好もし。役立たんと思し召されば、それがしが死にゆくよう手助けしたまへ。達者でおわせ、ヤクイン殿、わしは喜んで行かん。

第五場

ツミコンドン、ヤクイン。

ツミコ：おお、いたはしや。わがすべての臓腑が震ふておるわ。ああ、いたはし。

ヤク：それがし、この苦をまえにして涙を抑えることできぬ。なんとも重く、わしに信心ぶかきウコンドンのいたまし一件が、せまってくることよ。

ツミコ：いかにしてわしはこの苦難より、妹、義弟、子供、はてはわが身まで引離せばよいのやら。そなたは、われらに良い策を授けては下さらぬか。

ヤク：それがしには出来ぬこと。かくもティスが自ら危難を増しておるとなれば。

ツミコ：かりそめに申す。わしがこの飾りを御帝のみもとに持参いたすなら、いかがか。得策にてやあらめ。

ヤク：ならぬ。そればかりはまかり通らぬ。御帝は御贖恵給ひし。さらなるは、ティスが誇るによりて、なほ気色をそこなひ給ふ。

ツミコ：いかにして、わが手よりこの飾りをもてゆこうか。そは、わが飾りにあらずば。さらに、黙（もだ）ばかりは、われにとりて悪徳の道ならむ。

ヤク：いやはや、これはしたり。そなたには、わしの心をよう見抜けぬか。そのなかにはティスがおおり、そなたがおおり、妹御もおおり、いかにも青銅に金のひそみたるようであるといふに。そのものを、それがしに。それがしにゆだねたまへ。このたびばかりは、御帝のみもとへそなたが参らるは、良からぬこととならん。これ、その誉れの徴を、こちらへ。それがしが、忠義に御帝に手渡しいたさん。さらに、ウコンドン、またそなたの為の代弁者となろうぞ。

かく申すも、わしは御下命にて御帝のみもとにこれより参らねばならぬ。して、驚きもてティスが雅量を語ろうではないか。そなたが望みとあらば、そのものもまた、身に携えて行ってもよし。

ツミコ：すべてを取るがよい。なれど、それがしにはティスが安泰のため、またわが身のためにも何をなしえようぞ。教えてはくれぬか。

ヤク：何ひとつとしてなし。わしがそなたに忠言いたすも、黙し気急かぬよう、とぞ。ほかに良い策はなし。かつてわれらの上にあり、またティスに向かいし天の雲行は、はなはだ恐ろし。これが晴れぬ間は注意すべし。クシャンガは、彼が総大將

の命のため、また兵のため、精根を傾けるつもり。彼が意気をとくと闘（けみ）しておかれよ。この男の心には、いかようにティトスの身とそなたの身の上救われるべきか、案ぜられておろう。

ツミコ：いかに友輩。われらが、そなたの手により、誠ある助けを得られるとあらば、それがしはそなたに恩義を感じて限りなし。

ヤク：さ、もう参られよ。かけがへなき友輩。して、わが忠言に従ふておれ。

ツミコ：では、このとおり、そなたが言ふに従ふておこう^(a)。

ヤク：ほんに信じおったわ。うつけ者が。わしがウコンドンを好もしと思ふておるとは。去ぬるがよい。あはれな者め。そちも、ウコンドンに並みて欺かるとは。今日にも、あれなる男の奥つ城まで隨身をかふて出よ。

第四幕^(b)

ティトス・ウコンドンの寛大でつよき魂。

第一場

ティトス・ウコンドン、キリスト教徒の仲間を連れて。

ティト：わが妻よ。また従臣たち、子供たちよ。わしが、天におわしますかの天主に導きし者たちよ。さても、天主はわれもそなたたちをも戦に呼びわり給ひける。天主はわれらを勝者の冠もて嘉したまふ。そは、すでにわれの頭のためにも、そなたたちの頭のためにも編まれており。さても、示して見せようぞ。キリスト信者がまことの寛き心を抱いておることを。わしは、ここで打ち明けせねばならぬ。この戦は厳し、されども直き終わりぬ。心に留めおくべし。われらは、目を閉づ間にこの世より天主のみもとに参らむ。さらに永久の安らぎが、短かき苦しみの後に訪れん。

クララ：わが夫。ただ一事だけがわが願ひ。そは、そなた様とともに身罷ること。それといふにそなた様なく生き、そなた様がすでにしかと得し物を、その後に受け継いだとて、わが心の重荷となるばかり。

ティト：わしがそなたの後に身罷るか、前にか。それが何の係りやある。信心と忠義こそ、われらを寸刻のちに天上にてわかたれず、勝者の枝もて飾り立てけむ。そ

(a) 彼は去る。

(b) 座敷にて。

『キリスト教信仰における不屈の情熱』

あなたがわれより先に罷るなら、われもまた強るよう、手助けせよ。また、わしが先駆けすなれば、わしこそあなたの介添へいたそう。

マルチ：おお、父上、母上。もし、憤怒がお二方のみ命を奪ひ、かつはわれらが血を赦免すなり、気ままな欲を許すとあらば。また、はかりごとや甘言ありて、われらが心に向け、かつは、気を引き、かつは贈物などして楽しませるなどすれば、いかがいたしましょう。もし誰一人も天主の御言葉、われらが信心の言葉を、われらが前にて語らぬのであれば。また、われらがあまりに多くを許され、われらが天主の教へが許し給わぬことあらば。もしや、われらが追はれし時に、退く先を断たれ、もはやキリスト信者の誰一人としてわれらを心強くさせず、いかな手本もわれらを殺くさせずとあらば。また、死に際の怖ろしさが、弱る年頃なれば、己が性によりいと痛ましきを知るときには。おお、天よ。恩寵も人を強ふも、憎むも愛づるも心惑ひさせ、また、弱る生心を情欲と争ひさせる、かような危き事どもはいかなるものか。ああ、父上、母上。われらを代願にて助け給へ。

マツテ：われらに、われらにこそ番あり。ああ、いと愛ほしき父上。何卒、われらを先に遣り給へ。そなた様の男の子に天の国を得させ給へ。しばし、番をお待ち下されませぬか。われら、この地（つち）は父上より得られし。なれば、天（あめ）もまたわれらに与へ給へ。さすれば、われらも永久に豊み栄へましょう。然らば、われらを先に行かせ給へ。死をわれらに覚えさせ給へ。われらを弱げなるもの、心惑はすものが悪しきに導かぬように。

ティト：男の子たちよ。この選はただ天主より下されむ。天主が冠を分け与えたまふもの。そなたたちは心固めするべし。そは、冠がそなたたちの額に廻るよう。

シモン：いかに美はしく、愛らしき花の冠になることよ。われには、もはや花の香が立ちこめるよう。いかなる光明、いかなる煌き、またいかなる匂ひが天より下されし薔薇に宿りしか。この世にても、薔薇はかくも愛らしく匂ひ、われらが目に快きゆへ。

ティト：わが子よ。そなたはまだ知らず、わきまへもできまい。そなたがため、天に積まれし歡喜のこと。

シモン：なれば、われらを行かせてくださいませ。まだ時いたらぬや。われは天に参りとうございます^(a)。

ティト：さても、旅立ちの時は近づきしが、……………時は過ぎぬ。いざ、皆のものの、戦にそなへよ。

(a) ティトスが時計を見る。

クララ：大きな天主様、わが主であり造り主であるお方様、われらが心を固め、そなた様がために殉教の道を歩むよう、われらをお召しくだされませ。

ティト：わが妻よ、よくぞ申した。そなたが振る舞ひこそわが心にかなふもの。天主よりそは来たらん。われらの頭が勝者の葉で飾られよう血戦を、われらが行ふときには。天主が御寵意は、われらがとらわれなき心を、いかな殉死にあつても、笑みさせてくださる。おお、これに応じてわれら幼な児の心もて、天主が御心に全き信を置こうぞ。さても、われと共に、彼が名を呼び、介添へを希はん。そは、彼が誉れにかけて、誰もが罷るよう。従者たちよ。われらを助けて、主の御前にて心を打ち明けさせよ。かつは、天主に御慈悲と御介添を乞ひ希はせよ。

第二場

ゴモルドン、前出の人物。

ゴモル：われをなむ、御帝が遣はし給はれた。御慈悲か死か、そなたに告げんがため。そなたに迫りし時は、まことに過ぎ去りし。では、そなたたちはいずれを、選び給ふや。

ティト：死を選ばむ。

ゴモル：（なんと厳しき答へ。そなたの言葉は、わしの肝を惑はすよう。）

ティト：われは今も、後もキリスト信者なり。さても、これなるわがもとに控へし者ども皆、天主の教へがため、われとともに死ぬべき覚悟なり。

シモン：われもキリスト信者なり。

ゴモル：（いかにして、この童子の心が見もせぬ天主に寄する、これなる思ひを抱けるというのか。げにこれなるは、齢にまさること。ああ、主上、御身の宣下はいかに厳しき。かくも傷ましう、われをお苦しめなされる。）愛しきウコンドン殿、わが振るまひを許し給へ。われは、何事にも従わねばならぬ。一言言葉を控えねばならぬわい。なぜというに、おののき、怖れ、また痛まし思ひがわが内に強まりしゆへ。

ティト：わが友垣、もしや、そなたがもってきた報せに、難儀を覚えられたか。そういうことはないぞ。されば申せ。われらが皆のうち、誰ぞ天主の教へのため、第一の犠牲となるを許されるのか。

ゴモル：ああ、何としようか。この3人の子、すでに死と定められていたり。されど、御帝、いまだ子らに、対面したく思し召したまへり。君はお腹立ち給へり。

マルチ：わが兄弟、われらにとりて、これは、いかな幸運ぞ、御慈悲ぞ。また喜びなりや。見よかし。われらこそ、勝利、第一の殉教の冠のため、天主の御恩寵が召

『キリスト教信仰における不屈の情熱』

したまひし者ぞ。

クララ：そなたたち。そなたらの祈念は、空を抜け、天主様の御もとに届きました。なんとよき日ぞ。わらはは、そなたたちを恵まれし者と呼びましょう。されば、死がこの母をも連れゆくでしょう。

シモン：父上。われら、天主様の御もとに、御助け求めて、声をあげむ。

ティト：よし。愛しき子らよ。これこそ第一に心に留め置くべきこと。かけがへなき友垣、ゴモルドン殿。この世の覚へに、わずかばかりの一時、われとわが一族郎党に、分けては下されぬか。子らがわれから罷らぬ前に、天に向かひて、歌により助けを乞ひ希おうと思うのだが。

ゴモル：いかに友垣。そなたこそは存じておろう。われはそなたに何事とて、とどむるもの無きを。歌へよかし。歌ひて、そなたらの天主に、言祝ぎ誦（ずん）じ給え。われは、しばしその間、巖のごと、黙しておこうぞ。また、そなたらの邪魔はせぬ。

ティト：天主のみおはします。かの善き天主こそ、闘われらを力づけてくだされる。おう、それゆえ天主の誉れを歌おうぞ^(a)。

雄鹿が息荒く、泉に駆け寄ること、天主の慈愛に、わが心は、ほてり早鐘を打たむ。まことの神を見むと、われらの喉は熱く渴へるよう、いつかわれらに、その日やようよう来たらめ。

われら歎きつ、涙しつ、そなた様を乞ふて夜も日もなし、主よ、われらはそなた様を求め、そなた様に、念じ入る。

あれなる者たち嘲り言うに、申せ、いずこにか。申せ、いずこにそなたらの天主がおわす。神がおわす。

主御身よ。世の者たち罵（の）りて、わが喉の渴きが増すばかり。者どもの舌、驕りて御名を汚さむとあらば。

おう、天主の館は、いかばかり巖し。いかな壮厳ぞ。われらが勢（いきほ）ふ霊（たま）に向かひて、笑（ゑ）まふるは。

何と霊よ、そなたは悲しふ。心を起こせよかし。天主をのみ乞ひ希へ。そなたを、父のごと、愛ほしと思し召し給ふ。

誰ぞ、われらが天主のごとくある。誰ぞ、わが主に妬（し）かめやも。彼の瞬（まじ

(a) キリスト教徒たちはひざまずき、第6の合唱調で受難の冠を得たいと歌う。

ろ)きて、世をつくり、天(あま)の御空をつくり給ふ。

よし幾千条の縄手、われらに搦め手、絡み上ぐとも、何ぞなすべき。天主がわれらに、心しらひ給ひければ。

いざ、主よ。覚め給へ。われらに心寄せ給へ。われらより、主御身の血はいのち得、安心(あんじん)得給ふ。

主よ、われらを強め、心固めを諭し給へ。流せし血潮がのちに、われら天に入らむ。大きな天主よ。御身、ただ一人にこそ栄えあらむ。御身が力なむ、永久の世より来たらむ。

ゴモル：いかにも、わが心は美(いつく)しき頌歌に動かされること。

ティト：さては、子たちよ。かの路歩まん。そはそなたらを怖じさせるとも、永久の幸せをあたえてくれよう。いざ心固めして戦に臨まん。

マルチ：お父上^(a)。いかな感謝をわれら、父上に捧げられましょう。父上よりわれらに流れ来たらむ、この信教の慈悲なる光のために。いかにわれらは幸なるかな。われらすでに天の民とあらば。命とともに、父上はわれらに天の国に入る権利を与えてくださった。

クララ：^(b)ああ、わがシモン。死ぬるはそなたを怖じさせぬや。

シモン：何と仰せらる。最も小さき怖れとてもなし。わが死こそは小さきゆへ、死の影は多くをわが小さき身の内に見ず、とぞ。母上こそ、より大きな死に当てられましょう。わたくしは、歡喜に満ちて天の戸の前に立っておりますぞ。して、わが喜びのためには歩み入らず。母上様、そなた様が参られるまでは。

クララ：なれば、出立ち給も。限りなき命、身罷りて得るよう。おお、わが子たち、達者で。貴き3人の兄弟よ。

マルチ：お父上、われらを嘉して、介添へし給へ^(c)。これぞわれらもつとも焦がれてお願い申す、最後のご恩。お父上、われらを嘉し給へ。大きな歩みにて、お父上の徳ある御心が、われらとともに殉教に向ふよう。

ティト：いと高き天主の慈悲と御力が、そなたたちを戦にて介添へして下さるう。そなたらの心が強りて身まからんがため。流れし血潮もて、そなたらが受難の冠

(a) 彼は父親の手に口付けし、二人の弟が後に従う。

(b) 彼がその手に口づけしたのに応じて。

(c) 彼は二人の弟とともにひざまずく。

『キリスト教信仰における不屈の情熱』

を得られるよう。おお、天主様。われは主御身に子たちを捧げん。これより、子たちの父となり給へ。子たちを祖国に導き給へ。

いざ、勇みて慈悲ある先にたどりつくべし。そは、そなたらを殉教に呼び給ひし。そはいかな滞りも許さじ。

マルチ：ゴモルドン殿。貴き友垣よ。刑場はいずこにてやあらむ。この通り、われらはそなたに従ひましようぞ。喜びていざ進まん。

ゴモル：(いかにわが心、これなる子たちの徳に打たること。) 御帝は、そなたらにいま一度、最後の面会を望み給はれておる。

マルチ：ここにわれら3人、揃ひてあり。これより為さるべきこと、為すまで。

3人揃って：おお、父上様、母上様。われらが後におはしませ。

クララ、ティト：ああ、男の子たちよ。われら5人、皆で幸せに暮そうよ。

シモン：いかに嬉しきことぞ、われ天主を抱き奉るとなれば^(a)。

第三場

ティトス、クララ、クシャンガ、家来。

クララ：わが垂乳根の母なりし心は焦がれ、慈しみを覚えます。わが子たちが離れてしまうと。子たちが苦しみ、わらはをもまた打つ。子たちのみ、天主のために罷るとあらば。

ティト：神なる天主が、われらに下され給ひしもの、再び取り給はれるまでのこと。それも言うに、いと正しき由をもて。いかな悲しみにあるとも、主は主なりて、死と命を下され給ふ。主が、この限りまで続く命を奪ひ給ふのは、われらを愛しく覺し召し給ふゆへ。いかにと言ふに。主は永久の命を得させ給はれるゆへ。主が思し召しこそ正しき。またも聖し。主は与へ、奪ひ給ふ。そは、主が思し召し給ふように、また、思し召す物を。われは、主の従臣なり。われには臣従こそがつとめ。おお、天主よ。御身こそ正しき。御身をこそ、ティトスは崇め奉りましようぞ。……誰ぞ嘆き、走り寄る足音がする^(b)。一クシャンガ、何ぞわれに告げることやある。

クシャ：殿、そなた様とのみ、申し合はすことありて、平に御容赦のほど。

ティト：従者たち、下れ。われはひとりでおりました^(c)。

(a) 彼らは引き立てられる。

(b) シャルンガがやって来るのを見る。

(c) 家来が引き下がる。

友垣、訴へ申してみよ。そなたは、わしの判決を潜めておるのか。わしが今や身罷るべしとぞ。相違なしや。さようのことども、申してもかまわぬ。

クシャ：あな、そうではございませぬ。げに、こればかりは。それがしは、そなた様が奥つ城を求めておるのではございませぬ。われを遣りしは、かの武士、また殿が友垣なり。あの者たち、殿が目配せ、また御下命あるを窺ふております。知り置かれたくは、かの武士、殿をこれなる垣穂のうちに籠らせ、殿に何人たりと害を及ぼさぬように、とぞ。また、殿が御下命とあらば、御帝が御城にも攻め入らむ、とぞ。かの者はまた……。

ティト：えい、口を噤め。忠義に背き、信心に背くかくなる行ひ、真のキリスト信者なれば、異教徒にも許さず。いかなる荒まし怒り、かの武士の身に染みておるのか。帝の仇となってもよい、などと。

クシャ：総大將様、殿が死こそ、戦の兵をして荒々しくさせ給ひぬ。殿こそは、罪なきゆへ。

ティト：人がわれらを強ひるにあらず。われらみずから、これなる判をくだしたのだ。われは死なん。わが主上、御帝はこれを願ひ給はざりきが、わが死は重々しふ思し召し給ふ。かの戦の兵に申し伝えよ。敢へて手など、主なる方に向かひて上ぐるべからず。彼は、その仇をウコンドンに見るやも知れぬ。もしやこの怒りのままに、悪を為したとあらば。

申し伝へよ。かの者、事の前に彼が大將と打ち合うことになろう、と。こればかりは、血の限り、帝のために敢へてせん、とぞ。クシャング、われに証せよ、最後の忠義。また、そなたが民、不服従せぬよう、見守りせよ。

クシャ：総大將様。御下知こそ厳しけれ。それがし、わが命をかのつはもののごとくに、殿のためなれば喜んで捨てむ、とぞ思っておりましたものを。なれど、殿の御気色、わが心を押しとどめられました。それがし、御下知にまつらわねばなりませぬ。

ティト：それ、この小さき品を見よ。この匣子（かふし）を、われはそちに、またそちも見知っておろう他の従者たちのためにも、形見に置こう。われら離れてゆかねばならぬ。しからば友垣、友の形見にと、手に取れよかし^(a)。しかれども、そちがここではわれに仕へ、また、忠義をそちの兵どもとともに御帝、そちの主人に尽すとの務めをふくめて。のう。

(a) 彼に金細工の小箱を渡す。

クシャ：ああ、勝者よ、いと勇ましきお方よ、いかに戦の兵やそれがしなど、殿の身の急落に苦しんでおりますことか。それがしにはこれを支へられませぬ。止められませぬ。一やすらかにおはしませ、そなたこそ大和し国の護り。わが大将、やすらかにおはしませ。それがしは、殿がそなえられたる、仁徳をわがために役立て、もはや黙しておくことにいたしましょう。勇まし君。殿が御心、それがしより涙を絞るばかりにて。殿、わが魂はいと広き心を称へ、また有り難しと思ひつつ—ああ、なんとわれには言絶ゆことよ^(a)。

クララ：わが夫、ティトス様。人じきにわらは、クララをも尋ねてくるでしょうか。わらはは、もうじきわが子どもの許に参ってよいのでしょうかね。彼らは獄卒の太刀にて、もはやこの世の有りとおる痛みより逃れておりましょう。

ティト：やあ、天主は希ひを聞き届け給はれた。イエモンドンが、われらのもとに参るよう。あれなるは帝のもとより来りて、そなたに罪なふ判を、申し伝へるであらうぞ。

クララ：こなたに入れよかし。嬉しとぞ思ひて、身罷りぬ。わが子どもの許にいざ参らん。

第四場

イエモンドン、前出の人物。

イエモ：これは友輩、わが心づらしとぞ思ふ行ひを、無念にも、為さざるを得ぬ。そなたより細君を取りあぐとなれば。

クララ：わらははここに隠れなき。もしやわらはを信心がために召し給ふとあらば。

イエモ：まさに。その信心が母親をも墓穴に落とそうとしておる。穴にては、子どもすでに青白き屍とて、横たわっておろう。

クララ：いかななぐさめぞ、ウコンドン様。悦びなり、楽しみなり。わらはは、悦びにより心が定まりませぬ。

ティト：身内の血潮、血管にたぎりて、熱き炎の胸に流れいるごとく。もうじき、子たちのもとに参るとあらば。では、妻を連れゆけよ^(b)。しかれども心得うべし。われは御帝にわが死を望み奉りけれ。子たちも妻もわれなくば、さは長くも天にはおらじ。

(a) 彼は泣きながら去る。

(b) クララを彼のほうに差し出す。

クララ：友よ、わらはがじきに子たちのもとで暮らせるよう、ご配慮を。

ティト：友垣、われがじきにわが殉教の冠にて、天における妻と子たちのもとに往かせ給へ。

イエモ：いずくにそなたらを愚かな妄心は、引きつれてゆかめり。子たちの罪なき血では足りぬのか。そなたはさらに幾人か、辱かしめ不幸に落とすつもりか。

クララ：愚かなる者ぞ、口を慎むべし。そなたこそ、天主の御恩を知らず。命ぜられしことのみ為すべし。

イエモ：(いかに、気強く言ふことぞ。) なれば行かん。後に続かれよ。

クララ：いまひとたび抱かせ給も、わが夫。どうぞ御無事で。じきにわらはのもとへ、おいでなされ給も。ゆめお疑い召さるな。わらはは喜びて、後に従ひけり^(a)。

第五場

ティトスひとり。やがてツミコンドン、最後にゴモルドン。

ティト：さても、われ一人になった。主よ、語り給へ。御言葉は、主の御心に向けしわがこころが理解いたしましうぞ^(b)。わが天主様。われを主の御前にて、ゆめ投げ払い給はれるな。この父親を、追ひ払い給はれませぬよう。われにも、子たちにさずけ給ひし、冠を得させ給へ。このウコンドン、主の従臣とて、御身にこそクララが魂のため、力づけを乞ひ願ひ奉る。あれが死を怖るゆえ、ゆめ罷り損なうことなきよう。

ツミコ：敵なり、義弟よ、敵が来たりし。一戦交へるべし。さあらずば、御帝の高御座も御威勢も、一夜に沈みもせん。助け給へ。御帝を救い給へ。

ティト：なんと、御身に事有るまじき。天主こそは、御帝の安泰を守り給ふ。われに、このわれにこそ敵の鋒は向けられるべし。それがしのみその怒りが当るべし。われこそは、彼らが犠なり。それがしをわが敵がもとへ連れ行けよ。

ツミコ：心置き給へ。義弟よ。モロドンこそは、自ら帝の位につきたしと、のぞみおる。また、ヤクイン殿の手をかり、坊主を治め、…

ティト：これらの者どもが見張り、窺ひしはわれなり、御帝にはあらず。いな、御身にはあらず。おう、これなる謀叛は、じき鎮めらるべし。

われは大刀も佩かぬながら、敵に立ち向かってゆくこともできようぞ。

ゴモル：はやく、はやく。勇まし人よ。さもなくば、いともたやすく、モロンド

(a) クララが連れ去られる。

(b) 彼はひざまずく。

ンの怒りに御帝、負け給ひけるを。彼は、大刀佩きて進み来たり。また、わが目が欺いておらぬのなら、そなたにこそふさはしはずの、そなたの杖をも手にしておる。彼が軍兵、城門の前に立ち並び、大守シャルンガは衆ども民草を率い、大きな音声をあげ騒いでおる。また、ヤクインめは、今日には側方（そばさま）の守りなり。イエモンドンめは、秘計をめぐらしており、すべての事様を心得ふ。彼こそは、内より大裏を乱そうとす。ゆへに友垣、そなたにはあらじ。モロドンが怒るは。いな、帝御身にこそ彼が憤怒はむけられし。されば、そなたの忠義を顕し給へ。顕し給へ。そなたが血と命を、たとひ追はる身にても、御帝がためには捨つる、とぞ。

ティト：われが大刀佩かず、敵を止むるなど、いかにせうぞ。

ツミコ：われ思ふに、兵（もののふ）も、荒まし民も、ただひとたびかの戦の兵（つはもの）なるそなたの姿見たれば、勢ひも鎮まるはず。そなたの目配せで、戦も始まりましょう。それというに、われ心得は、いかな一揆としてそなたが向かへば鎮められたゆへ。この刃をそれがしより受けとり給へ^(a)。そなたに必要とあらば。

ティト：思ふに、この闕（しきみ）の口に古い刃が潜められておったはず^(b)。

ツミコ：義弟よ。急がれよ。心もとなきは、兵の怒り。そなたの姿なき上は、勢ひ立ち増さろうぞ。

ティト：この剣は古（ふ）りたれど、いかな太刀にても戦にはふさはしけれ。人がその振りを心得たれば。それというに、忠義と徳こそ勝利を得、不義こそ敗れてしかるべきゆえに。

ゴモル：では、何ぞわれら、御帝が無事のため、為すことがありますよう。

ティト：何もせず。ただ近衛司たちを戒め、御帝に忠義を明すべしとぞ。その上で、城中の門戸を固め、内裏をば差し固むべし。それがし、これよりわがキリストの党のもとに参らん。わが心のままに差配できるゆえ。わが手配にて、兵ども敵を手力（たちから）かぎり打ち懲らしめん。しかれども、もしや敵がいたう強りてあらば、彼が流せし血ばかりは、忠義なるまことの証となるべし。

ゴモル：されば、ツミコンドン殿。われら滞るべからず。われらは。われらは氣配いと危ふければ、疾く急ぐべし。

ツミコ：では往くぞ。そなたの一言あれば、皆すべてうまくことが運ばうぞ^(c)。

(a) 彼は自分の太刀を渡そうとするが、ティトスは受け取らない。

(b) 彼は古い刀を探る。

(c) 彼らは去る。

ティト：そなたらは城下を固めよ。われは武士のもとへ行こうぞ。天主様、許し給へ。いまひとたびの勝利を得たしと思い、再びここに。わが手によって、敵を打ち調じ給へ。そして帝に安らぎを得させ給へ。それがし、ひとたび事を成就しければ、キリスト信者として、主がために、身罷ることも請ひまいしょうぞ。

第五幕^(a)

ティトス、ウコンドンの三重の勝利。

第一場

ショウグンサマ、ゴモルドン。

ショウグ：わがもとに、ウコンドンと呼び参らせよ。さらに試みたきことあり。とはいへ、これが最後の慈悲。わが国にては畏まるべき神祖たちを罵り、あまたの門徒を獲るあやまてる教へなど、律令に背くものなり。これ以上われには、耐へがたし。して、彼の男に事を為させてはならぬ。わが大恩を徒にせば、妻クララと同じ道を歩まん。子も、父の魂に相見ることにならうぞ。

ゴモル：これは御帝。ウコンドンは、さまで疾く参り侍らず。

ショウグ：そは、いかに。——何の障りがあるというのか。

ゴモル：彼は、御身の追はれし高御座がため、働き侍り。

ショウグ：わがため、と。

ゴモル：御身がために。

ショウグ：当の身柄は自由か。申せ。あれなるは、もしや彼が兵どものもとにおるのではあるまいな。

ゴモル：御意のとほりにて。それがしが、あの男に事を頼み侍り。彼を間（ま）より引き出したのでございます。またツミコンドンもわれを助け、御身の冠を嫉むあらまし者めが、御身をはかりごちて、倒そうなどとせぬよう。

ショウグ：ゴモルドンよ。これは何事ぞ。この悪業の者よ。徒なる誓言（ちかごと）立つる者よ。それでもうぬはわれにも、また御法にも、また神祖たちにも仕へておるつもりか。うぬを雷が打ち込めればよい。傷ましきわれはなむ、氣取るもあまりに遅きに過ぎにけり。イエモンドン、忠義にもわれを説き、近衛自らわが命を窺ふを

(a) 大広間にて。

知らせてくれたが。さてさて、徒なる誓言は明かになりき。

ゴモル：願はくは、わが良き心映えを侮（あなづ）らはしく、思し召し給ひますな。それがしは、御身にわが身を全うし…。

ショウグ：黙しおれ。これより、いかな言葉も徒にてはあるべからず。われは、今こそうぬの謀（たばか）りごとの証人なり。これではなんら驚くことはない。われを守るべき衛士がなむ、われに背きつるなど。彼らが大將がわれの敵（あた）、また刺客（せきかく）とあらば。詮ずるところ、われは確かなことをしかと悟りし。わが衛士の手が、この命を欲すなど。この刺客め、荒夷（あらえびす）め、それなる者は何人も生かしてはならぬ。

ゴモル：いかな過てる思い込みに、御身はかくも憤り給ふや。このゴモルドンこそは、御身に与せんと。これはまことにて、御帝…今、御身の敵がつかねられてまいりました。そは御身の衛士を唆し、御身にも、わが下知にも背かしたのでございます。あれ、ごらうじられませい。ツミコンドンが御身のもとへ捕へて、連れてまいりましたぞ。

ショウグ：わがイエモンドンとは、これいかに。搦めとられをる、とは。おお、いかににはなはだしく、彼が無慚なるざまにて、わが胸つぶることよ。うぬこそ、どれほど無道なことをするつもりぞ。この徒徒しき侍ひめ。われは、友の搦めらるざまを見ねばならぬのか。いつはりて王となる者だけが、われに悪業を成さば成せ。そはうぬの悪しき心が共に作り出だしたものの。うぬが思ひ上りて、その首を守るべき人より、命を取ったと言ひ囃すために。この恩知らずめ、大刀に手を掛け、われを殺せ。

ゴモル：あな、これこそは、それがしにはよしなきこと。それがし、御身のためにこそ、身を捨ててつもり。

第二場

ツミコンドン、イエモンドン、前出の者たち

ツミコ：これなる悪人を、この通り、御覧じられませい。これなるは欺きと謀りごとによりて、御隨身（みずいじん）をいつはり、彼が舞ひし猿楽、シャルンガが甘心（かんじん）したものに候。

ショウグ：（こはいかにありうべきぞ。彼がかような事をなすとは。）申せ、ツミコンドン。いづくより証し立てをする。

ツミコ：主御身、これなる文を御覧じあれ。御身には訝かしと思し召されることのでございましょう。ここにシャルンガの手ずから、御身を覆へさんと、したためられておるとは。さる戦の兵、この男をば搦めとり、忠なる情から、この文をわれに譲つ

たのでございます。誦じられませば、御身は、ただちにイエモンドンが正体（しゃうだい）を、見そなはし給はれることでございます^(a)。

ゴモル：いかにも捗捗（はかばか）しや。これで御身は、謀りごとが明らかになったのち、ゴモルドンは御身の敵、刺客にあらず、と得心し給うことござりましょう。

〔帝が手紙を皆の前で読む〕

わが友垣、イエモンドン殿。わが目配せに、目を凝らしておけ。わが下知を、大和し国の男子（をのこご）すべてが知るよう、差配せられたし。われら生粋の神祖たちの血より産（む）す、地（つち）の申し子なりて、神命（かみのみこと）、天日（あまつひ）、月代（つきしろ）の御族（みぞう）なり。われら、釈迦に賜はりし勢力（せいりき）もて命ず。ショウグンサマを害し、ティトスが命を奪へと。ふたりしてわれらが神祖を浅み、ふたりながら、天主教が浅ましき信者に仕立ておった。彼らが教へは世を損うておる。ふたりともしとめるべし。われらがくだした下知を、果し逐げんと思ふ者なれば、けして悩まず、けして死ぬまい。そは年高く永らへて、生き身にて天に昇るであろう。このことを、われらは誓言（せいごん）いたした。さればいかにも案の如くに、なし逐げられよう。

シャルンガ

ショウグ：佞人（ねいじん）め。うぬはわれをさぞな欺きけるや。いさ、名聞（みやうもん）の几帳は引き遣られけり。冥道の畜生め。

イエモ：御許し給へ。信仰こそ、この罪科にて候。それがしが思しけるは、シャルンガの差配にまつらへば、それだけでわれらは神祖たちに奉仕することになろう、とぞ。

ショウグ：善根（ぜんごん）をいつはる者め。やれ、うぬが信仰とは何の価値があるものか。それは隠れ蓑にすぎず、うぬが徒心（あだごころ）を包んでおろう。悪虐無道の者め。一これなる出来事は、いったい何の騒動か。誰そこの信仰を驚かす。もしやあらたな仇、押入るとでも言うのか。

イエモ：〔あはれ、かなしや。もはやこれまで。誓言誓ったもの同士、希望の拠り所を揺（あゆ）がしけり。彼ら召し取られければ。〕

ツミコ：鳥刺しも賑はし。さても時津風、吹いてきおったわい。

ゴモル：徒し言なるは、おのれ同士に罣を張るものぞ。

(a) 彼は帝に手紙を渡し、帝はこれを開く。

第三場

モロドン、ヤクイン、クシャンガ、前出の者たち。

クシャ：われらこそ敬い申し上げます。御帝のこの御面前にて、これなる2名の逆臣を、お目にかけます。仇討ちなさいませ。

ショウグ：クシャンガよ。そちの忠義は、われに手向けられた貴いものぞ。

クシャ：主上、この一事は全くもって、天主教に感謝すべきでござります。と申すも、この教へこそ、家臣の心にたがをはめておるのでござりまするゆへ。この通り、モロドンは金で兵を抱き込み、ヤクインといへば、彼には与えられるはずもないもの、苦のない生活を約束し、彼の悪性をきはめます。また、かようなことにも相成って候。郷の習いにしたがって、神祖たちに香などたいておったもののふが、これなる差配を応諾し、それがしのつはものよりひとり離れ、下種な謀叛の輩の列に加勢したのでござります。そして、言葉と力で、一揆に立ち上るよう仕向けられて候。これに対するキリスト兵は、それがしをティトスのもとに送り、あの男が一番危難にあると、われに説かせました。無論、彼らはあの男にあらゆる介添へを申し出て候。彼らは不満を鳴らし、モロドンが一党に死をせまったのでござります。なれど、ティトスは、それがしがこれを申し伝へに来るや、この申し出に気嫌を損じます。あの男が申すに、「何ということか。兵がわが死を避けてくれよう、とな。要らぬこと。これ、要らぬことよ。こう申せばよい。わしが兵に願い出させ、常に御帝に忠勤し、御恩を感じております、と言わしめん」と。

ショウグ：(いかなる恩愛、いかなる忠義ぞ。いかな迫害、いかな謀りごと、いかな苦痛がこようと、弱まることない貴い徳の光が射すことか。)

クシャ：彼が続けて言うに、おのおの方、主上に約束、誓言を守り、おのが努めを怠らぬようにせよ。また、いと高きお方より賜はった、かの生(き)なる教へより、決してはずれてはならぬ、とぞ。彼が、それがしが戦の兵にこれなることを伝えるようと、命ずるゆへ目をみはってございます。わが苦痛のさ中でも、心はなぐさめを見出し候。彼が、達者にくらせ、との言葉に。

ショウグ：では、誰があの男に、逃れるよう忠言したのか。

ゴモル：それがしにて候。彼に乞うて、主御身の介添いたすよう促しました。

ツミコ：これなる事は、御身、ご自身をおもんばかって行なわれたまで。さて、ティトスは身の自由を求めず、御身の御無事こそ、彼を動かす動機。この一事にかけて、彼は命を惜しまず。

ショウグ：わしが眼にしておるのは何ぞ、え、モロドン。——これはいかに、笏

に鎧り、綬ではないか。これらの飾りをウコンドンの手から得たのか。黙っておるのか。なんと大それたことをしでかす奴。悪徳がうぬの口を閉ざしておるわ。

モロド：これなることを御身には、使い遣られたるヤクインめが明らかにするであらう。

ショウグ：使い遣られるとは、いかに。誰によるのか。誰ぞ、誰がこの一件を指図した。応へよ、悪業の者め。誰がうぬに、この飾り一式を得てくるよう差配した。

ヤク：神祖たちの大きな友にして、坊主最高の長、シャルンガ殿がわれに命じ(もう話しても良いわな)、忠孝と信仰において、決してまげぬ者を飾り立てるようにと。

ショウグ：何と申す。シャルンガがなむ、かように帝の権利を弱めようというのか。

モロド：この者めは、御身を廃したうえ、御国にとりてふさはしからずと騒ぎ罵り、直ちにわれを新しき帝なりと、われが望みもせぬのに僭称し、御身にかわって信仰を守護すべし、と申したのでございます。

ショウグ：何と大胆不敵な坊主か。奴の悪業、いかばかりはなはだしき。また、うぬら、悪党め。うぬらはわしに背き、刺客と結ぶのか。——偽善者め。これなる悪行に、わが義憤は最も高ぶり、必ずや報復せん。

ツミコ：おのれヤクイン、シャルンガばかりに罪をなすりつけるでない。そなたに罪なしとは、とても言えぬではないか。そなたはたしか、この装身具をウコンドン殿の希みに沿うよう、またわれに約束したように、帝にお渡し申し上げることになっておった筈。そなたは、これをシャルンガのもとへ密かに届け、ただただ御帝を蔑するばかり。さても、われこそが証人ぞ。

ヤク：われら無念なり。おお、モロドンよ。この人生がわれらに与えし、呪われた時よ。われらが負わねばならぬは、われらの他に負わさるはずの傷。われら、みずからのたばかりに落ちにけらし。

ゴモル：ついに、ついに、この汚ない裏切者め、胸中に潜みし不実に憎しみ、日のもとに明らかになりぬ。——あれを御覧になられませい。ティトスが参りましたぞ。謀叛を鎮めたのでございましょう。おや、あれを、シャルンガも共に連れておりまする。

ショウグ：おお、この獲物こそ、われにとってはまことに喜ばしい。

第四場

ティトス。シャルンガは傷ついて、駕籠で運ばれてくる。

前出の者たち。

ティト：これで悩みなく過ごしていただけますぞ、御帝。御身の上に異を仕掛けし者は、自ら滅ぶにいたりて候。ここに血にまみれて座り、彼が心驕りが、御身、わが殿に手向いてなせし行いをつぐなうであります。

ショウグ：うぬが兵に、うぬが従臣たちに、これなる業（わざ）の手本を与えておるのか。うぬ自ら悪業の道を拓くつもりか。

シャル：何ゆへ信仰を拒み召さる。

ショウグ：誰ぞうぬにかようなことを背後から告げた。この害悪を撤いた、悪漢の名を言へ。わが風土の神々をわれは敬い、わが命をもその証しに捧げるつもり。誰ぞ憎越にも、かような作りごとを考えおった。

シャル：われのもとへは、ヤクイン殿、モロドン殿が話をもって参りて候。ああ傷ましや。痛みが増してきおった。一死が、その武器を鋭くしておる。一不実のヤクインめ—うぬこそ天に誅せられよ。—おお、御帝、お許しを—われははや、なすべきこともなしえぬ—一死が、—われの口より—一言葉をうばいおる。—われは死なん、さらば^(a)。

ショウグ：わが目の前より、この身罷りし者の亡骸を選び去れ^(b)。

[ティトスに向かい]：誰の刃にて、奴は悪徳の代を払うことになりおった。

ティト：手を下せし者は存じておりませぬ。その次第は、シャルンガが出で、僧侶たちとともに、すでに敵どもの籠りし主御身の城へ向う途次、それがしは武士どもと彼の前に立ち、城へは侵入させずにおきて候。と、騒ぎあり。坊主ども進み出で、わが方の兵が敵のごとく、列をなして十分に立ちまさりけり。と、双方に少なからず血が流され、坊主どもに城下の者、またわが方にも数多の者が倒れ候。この激怒の中では、ありとある秩序がかき乱され、シャルンガも傷を負い、倒れて候。これを機に、この坊主め、一息にアミダの堂に走り入り、荒まし兵の刀にさらされぬよう、その戸を閉ざして候。そこで、奴めは不安な思いに満ちて、横になったのでございます。

ショウグ：われはさまで長くは、坊主どもの成敗を猶予してはおかぬ。だが、うぬら、悪党どもめ、うぬらはその悪業にも似る、業苦を受くべきであった。われらは

(a) 彼は死ぬ。

(b) 死者が運び出される。

蔑され、神祖たちは貶められけり。また、うぬらの怒りは、国の法に背こうとしおった。兵どもよ、始末せよ。この殺鬼(せつき)めを追い払え。裏切者め。われはいまだ、成敗については手ぬるいかぎり。うぬらの腹を掻き切り、その魂を高名に悶えこがれる、かの黒い神たちに送ってやるがよい。

モロド：ああ嘆かわし。

イエモ：なんとつらき死か。

ヤク：主御身、われにお許しを。

ショウグ：もののふよ、ぐずぐずしておるでない。彼が姿は目障りなり。

モロド：わが憎しみは、この身の滅びを仕度しけり。

イエモ：われはただただ悪業の中にはべりけり。それゆえ、悪徳よ、そちと同じに死なねばならぬ。徒言よ。そちはわれをまた、成敗せらる身に落としけるかな^(a)。

ショウグ：愛しきウコンドンよ。われは今こそ再度、この国のため、ふたころなき忠義と、そなたの勇氣に感謝せねばならぬ。また三たび目も悦ばし。神祖たちを拝まん。さて、もしもそちがキリストの教えを捨つるなら、そちにわが天領を然るべき権として、遺贈してもよいぞよ。

ティト：主御身、われは、忠義を尽くし、御身のためには、いくたびもこの命を投げうち奉りけり。ただ、それがしがわが神、天主に不実たりとは、ゆめ思し召し給ひますな。この勝利が、われを受難から遠ざけてはなりません。御帝、それはなりません。御言葉を控えられませい。われをして、子たちのもとへ、妻のもとへ行かせ給へ。これぞわが願ふところ。キリストの教へのために、われを犠牲にさせ給へ。それがしもまた、わが子たちが王座につけられし所へ、天の国にて母とともに彼らが暮らせる所へ行きたし。

ショウグ：そなたが自ら滅ぶとあらば、さあるべし。ウコンドンよ、なれが本意はここにかなえてやろう^(b)。

ツミコ：殿、しばらく。

ショウグ：その願いは何一つとて聞けぬ。

ツミコ：義弟よ、そなたがそのようにして歩まん方、いづくか考えても見よ。妻とともに子たちまで、そなたは害したではないか。あの者たちの罪なき血が、いまだそなたを聡くせぬか。

(a) 彼らは兵によって連れ去られる。

(b) 隣室に去ろうとする。

『キリスト教信仰における不屈の情熱』

ティト：ツミコンドン、そなたは、身共があの方たちを亡ぼした、と思うのか。さにあらず。彼らは勝利の冠を得けり。今や、彼らは嘉せられて暮し、われを待つばかり。

ゴモル：友垣、そなたの血ばかりは、手をつけてはならぬ。願ひ申す。キリストの教へのために、益荒男の血を流してはならぬ。

ティト：ゴモルドン殿。最良の友よ。わが血を注がせよ。それはわが安泰のために流す。そなたを害すことはない。勝者と、そなたはしばしばわれを呼ぶも、身供の何を防げるつもりぞ。己れに打ち勝たざるように、と申されるか。

ゴモル：徒にも、われは何ひとつとて、うまく行かなかったのか。彼が心は屈せぬ。

ツミコ：では、行くがよい、恐ろしい男よ^(a)。われは亡き妹のために、仇討ちせん。

ティト：討つがよい。これ、これここにわが胸を出さん。

最終幕

ショウグンサマ、クララ、マルチアル、マッテウス、シモン。

前出の者たち。

ショウグ：皆の者、ここに出でよ。そなたらのもとで、ティトスが暮らしたい、と申しておる。

ティト：わが目に映るは何ぞ。一彼らは生きておるのか。一あるいは、魂（こん）となりてわが目の前で浮いておるのか。

クララ：よくぞ御無事で、わが夫（つま）ティトス殿。

ティト：控えておれ。不実な女め、うぬこそ子たちが亡び。そなたのことは、何も聞きとうはないわ。

マルチ：（天よ、われはこの言葉から、何を推し量るべき。）父上はわれらに向いて、お怒りであられるのでしょうか。

クララ：そなたは何を疑うておる。

マルチ：何がかくもお怒りにさせておるものか。

クララ：それはわらはにも、量り難し。

マルチ：その手に口づけしたく思ひまする。一父上。

(a) 刀を一息に抜く。

ティト：下がれ。

マルチ：何故、父上がご立腹であらせらるのか、その元（もと）をお教へ下さりませ。

ティト：口をつぐめ。

マッテ：父上、わが姿を御覧じよ。また…

ティト：去ね、うぬこそ憎らし。わが後ろに離れておれ。もはやうぬのことは知らず。名聞（みやうもん）の汚しぞ。

シモン：父上、お願いでございます。何がかようにお心を乱しておるのか、教へ給へ。

ティト：口をつぐめ。ひと言たりと口にすな。落ちたる母っ子よ。（何と腹立たし。何と忌まし。この気持ちかくも荒ましく、言ふに言へぬほど。）—このざまを堅き信仰と呼べるのか。匂引（かど）はしの女め。言葉と忠誠は、ほんに危うき際にあったのか。変節の女よ、風見のごとく、どの風にも応じて回り、心を変へん。うぬは母とて、子たちを誘ひ、道連れに落としめけり。この嘘つきめ、子たちを死より遠ざけるか。だが、去ね。地に落ち果てよ。うぬが子連れ、地獄まで。なれが心根は、天の報ひよりそれたゆえ。裏切り者どもめ、去ね。奈落の口は、おまえどもに開かれてあり。われひとり、神よ、御身の御慈悲を願い、われひとり御身のために、血の受難に向はん。おお、御帝、ごきげんよろしう。

ショウグ：いづ方へ往く。

ティト：わがために首斬り役が調べし、刑を受けに。

ショウグ：ここにおれば良い。かような怒りには、わが心、向けられてはおらぬ。感謝の念こそ、引き出だされておる。そは、そちの貴きわがための忠義にかなふもの。わしが敗かされけるは、ウコンドンよ、そなたにもはや隠せぬこと。わしは誉れをはづかしめぬよう、そちが死をもかけようとしている、信仰（しんがう）をそちに治めさせむ。そなたのそなへし堅固の信と忠義が、戦の上手となりけるゆへ。もしそちが、わしの目にもそなたの目にも見えぬ神につき、忠義をかように保つとあらば、そなたがわしを友また庇護の主と知ること、わが身にも何か益があることぞ。では、そなたの妻を連れてゆけ、そなたの子たちを連れてゆけ。そなたと同じ、キリスト教徒であるこの者たちを。彼らは賭ひにも責めにもめげず、神仏の勤めには向かわざりけり。こうしてそなたに、妻と子を返してやろうぞ。そなたの神を崇めよかし、いつものとおりに。これについては、そなたの一族にもそなたにも自由を許す。さて、われは、そちとこの国を分けようと思ふ。そちはこのショウグンサマがいかに感謝して

おるか、そちの忠義が、たとい恩義からであろうとも、われと国に益体のありけることを、知るべし。——この胸鎧りをうけよ。そは代々帝にのみふさはし^(a)。ここにこの、帝だけが執る杖をとれよかし。そは、臣下がそなたを、われに次ぐ首領と認むるよう。わが友垣、さても、われと誼（よしみ）を固めることを許す。そなたを試みたこれなる者の手に抱かせよ。そなたはなむ、心の求むるにしたがひ、責め惑はされても寛大で忠義であった。そのうへ、仇なるともわが身に仕へ助けとなった。

ティト：主上、この一事はいかがしたこと。家来とおたはぶれあそばしまするか。宣ひ給へ。徒なる幸が、われに新らしき毘をあざなひけるや。もしや、われを寵意が高く持ち上げるも、大和の国人の憎しみが、われをより深く転落せしめんようにとぞ。主御身。

ショウグ：さにあらず。これはわが誠なり。これにはいかなる徒し言もひそんではおらぬ。そちはわれと供なる摂政なり。ゆへに心配はいらぬ。

ティト：（わが至高の神であり主であるお方よ。もし、われがその榮譽のため、キリスト信者として、さらに永くこの世に生くべし、との御心であらせられるならば、さらに生きん。だが、何時であつても、主がためにはわが血を捧げましょうぞ。）主上、御身がわが妻、子ども、またそれがしにも、キリストの教へにとどませ給はれるとは、最高の御恵み、有難し。この大きな御好意に、天は御恵みと祝福をお授けくださることでしょう。さても、子たちよ、わが妻よ、そなたたちに、わが手を差し伸べん。われを抱けよかし。そなたたちが、かようにしたたかに危難に打ち克ちける故に、わが怒りも優し慈しみに変じぬ。

クララ：わが夫、そなたが徳を積まんと抱く、性根はいかに美（いづく）し。

シモン：兄上たち、われらはまた、父上のもとに寄り添えようぞ。

マッテ：さてさて、いとほしマルチアル、そなたの後につづこう。御手に口づけさせ給へ。

マルチ：お前たち、ここに参れ。父上の御姿により、われらに再びもたらされたこの喜びを味わうべし。

—父上^(b)、ようこそ。

ツミコ：妹よ、予期せぬ喜びたぎり立ち、心臓より手足に流れ入るがごとしぞ。

ゴモル：われも新たに生きん。今や心の平静を取り戻すことができたわい。

(a) 彼に高価な羊毛地と王杖を授けて飾ってやる。

(b) 彼は父の手に口付けし、他の二人もこれに続く。

ティト：御法に従ふ者、主に忠義を守る者。そは天主のいつとなし、慈悲ある助けを受けん。

神は全てにおいて、褒め賛へられるべし。

ティトスの口上

幕が開くにあたり、ティトスが浮かぶ雲に乗りて、いと慈悲深き領邦君主のまことに君主らしき恩寵等々に報いて、詩神の名においてなしたものの。

ほのめく太陽が、この大地に輝きや装い、また実りを授けるがごと、その光芒により暗き谷合を生気付け、闇の中の牧場、漆黒の悲しき夜の帳より開いてみせるがごと、かのヘリコン山が押し黙り、口さがないツィタールが口嚙むがごと、かのデルポイの神、桂冠いただく詩神の頭目、彼が熱き眼をツィレンの水面から離すときには。おお、慈悲ぶかき殿、そなた様にご臨席賜りますとも、われらが詩神のリラが目覚めもせず、かの住まいに灯を点さぬときには、かの神は微光でさえ、また魅惑すらも放たずにいましょう。

これなる舞台は、平素はほかの誰にも語られず、年に一度の幕開きなるも、殿によりて新たに活気づき、その御徳、御威勢にちなみ、忠義と子の孝行のごとき奉獻とて、キリストの劇を捧げんとするもの。

殿の崇高なる精神、いかなるときにも大なる想い抱く魂が詩神を魅了し、われらがヘリコンをして、ティトスのキリストの情熱について他の手本となるよう、悲劇の調子で語らせん。

お慈悲深き殿、御主人様、ミューズのよき志を御覧じ給へ。この神にご愛顧下され給へ。

Dritter Aufzug. (a)⁴
Der öffentliche Haß wider den Titus Ukondon.

Erster Auftritt.

Xogunsama. Xarunga. Gomordon.

Xarung. Gieb meinen Klagen Statt! bestraf' den kühnen Spötter
Und räche das Gesetz, den Glauben und die Götter!
Verweile nicht, damit das Gift nicht weiter greift.

Xoguns. Ich soll den züchtigen, der mir zur Hilfe läuft,
Der meinen Bruder schlug und dessen Aufruhr dämpfte;
Der für mich wie ein Löw getreu und siegreich kämpfte;
Den Helden, den der Sieg zum besten Freunde mach't,
Aus dessen edler Brust die reine Unschuld lach't,
Den soll ich züchtigen? Dieß heißt zu viel begehren.

Xarung. Zu viel? – Weit grösser ist der Irrthum seiner Lehren;
Da er die Götter schimpft. So ein Langmuth ist
Verderblich, wenn man schweigt, und zusieht, wie ein Khrist
Ganz ungehinder't Recht', Gesetz und Glauben schändet,
Und seiner List zur Hilf' durch Irrwahn and're blendet;
Wenn eine fremde Lehr' so gar den Götter'n schmäh't,
Und alles Vaterland in das Verderben dreh't:
Und einen solchen Mann kannst du unschuldig nennen?

Xoguns. Er war mir stets getreu, ich muß es einbekennen.

Xarung. Doch ist er dem Gesetz', den Götter'n, dir und mir
Im Glauben ungetreu. Dein Amt begehrt von dir,
Daß du die Dienerschaft der Götter, ihre Lehren
Und Kamens Heiligthum und Xakens Macht in Ehren
Erhältst und höher treibst, damit das Glaubenslicht,
Das uns der Himmel gab, durch falsche Lehren nicht
Verdunkelt oder auch wohl gar entrissen werde.

4 (a) Der Garten

Das Göttliche zieht vor; von diesem fließt der Erde
Glück, Heil und Segen zu, der deinen Purpur schütz't;
Willst du die Strasse selbst, die zum Verderben nütz't,
Eröffnen, wenn du schweigst, da andr'e hönisch lachen,
Und nur ein Puppenwerk aus den Gesetzen machen,
Die doch so heilig sind? – So legest du den Plan
Zu der Verwirrung selbst, wenn sich ein ieder kann
Nach seinem Aberwitz itzt neue Götter schnitzen.
Sey also mehr bedacht, dein eig'nes Heil zu schützen;
Denn willst du, daß dein Reich in guter Ordnung sey,
Greif itzt das Uebel an! laß keine Zeit vorbey,
Damit dasselbig nicht tiefe Wurzeln schlage,
Die Iapon nach der Hand' nicht auszurotten wage;
Es ist mit dieser Sucht der Kriegsmann schon beflecket
Und lieb't das Khristenthum. Ein Wink des Feldherrn wecket
Und reizet seinen Muth zu einem Schritte an,
Der dich vielleicht noch heut dein Leben kosten kann.
Laß doch Gerechtigkeit den Ponzen wiederfahren,
In derer Namen ich hier rede, steh dem wahren
Gesetze Iapons bey; Es foderet das Heil
Des Reiches und die Ehr' der Götter, diesen Greul
Zu tilgen; dieß begehrt dein Wohl, dein eig'nes Leben,
Sonst mußt du deinen Thron der Wuth zum Zinse geben.
Schütz' also das Gesetz, sonst stürzt't der Glauben ein!
Es muß der Götter Schimpf mit Blut gerochen seyn.
Xoguns. (Wie? ich soll dieses thun und ienen tödten lassen,
Der meine Stütze ist? – ich soll den Retter hassen?)
Du foder'st gar zu viel, da du so einen Mann
Verdamdest, dessen Treu' ich niemals hassen kann.
Wie wäre es, wenn ich ein leichter's Mittel wähle?
Xarung. Ein leichteres? und was?

Xoguns. Des Titus edle Seele,

Sein gutes Herz, die Treu', die er geleistet hat,

Sind mir bekannt, er giebt gelinden Worten statt:

Ich will durch Schankungen und Worte ihn bezwingen.

Xarung. Von beyden, glaube mir, wird keines dir gelingen;

Geschenk' und Drohungen verlach't der stolze Mann.

Wenn man ein Uebel nicht durch sanfte Mittel kann

Vertilgen, muß man gleich das äußerste ergreifen.

Xoguns. O Nein! die Götter selbst sind nicht so gäh und häufen

Auf Streiche Blitz und Streich: nur ein Gemurmel kleckt,

Daß es den Sterblichen der Götter Zorn entdeckt.

Wenn Titus auf das Wort des Kaisers seinen Willen

Nicht änder't, dann will ich Xarungens Rath erfüllen.

Xarung. Wohlan! versuch' dein Glück und brauch' Ermahnungen:

Doch wenn sie fruchtlos sind, und wenn auch Drohungen

Des Titus wilden Geist und Eigensinn nicht brechen,

Dann Kaiser! greif zur Rach' und denk an dein Versprechen

Und tilge diese Schmach der Götter durch das Blut.

Xoguns. Gomordon!

Gomord. Höchster Herr und Kaiser! was geruh't

Dem Knechte zu befehl'n?

Xoguns. Geh, laß den Titus kommen!

Gomord. Verzeih, wenn er zu spät erscheint; ich hab vernommen,

Er sey zum Kriegesherr getreten.

Xoguns. Und warum?

Gomord. Der Krieger wildes Schwert, das für das Khristenthum

Auf alle Ponzien sich rüstet, einzuhalten.

Xarung. Ihr Götter! welche That! siehst du den Irrthum walten,

der wirklich wider dich des Himmels Rache zieht?

Xoguns. (Was Unglück drückt doch den Titus!) Sey bemüht,

Die Ursach' ein zu seh'n und ruf mir Ukondonen. (a)⁵

5 (a) Gomordon geht weg.

Xarung. Soll meinen Ponzen der Kriegerstaal nicht schonen,
Dann soll mir zum Ersatz' das Blut des Titus seyn!
Xoguns. Warum des Titus Blut? geh nicht zu schnell darein!
Die Ponzen können hier so wohl, als die Soldaten,
Alleine sträflich seyn. Es muß auf alle Thaten
Nach der Gerechtigkeit des Richters Urtheil geh'n.

Zweyter Auftritt.

Morodon. Yemondon. Die Vorigen.

Morod. O Kaiser! der Soldat fängt an sich aufzubläh'n;
Der Sieg mach't selben stolz: als er in Kamens Haynen
Und Tempeln, wie das Volk, beym Opfer sollt' erscheinen,
Schlug er den Auftrag ab, sprach von den Götter'n schlecht,
Und schrie: Des Titens Gott sey nur allein gerecht,
Und übertreffe weit die Götter uns'rer Lande.
Der Sieg sey ganz allein von dieser Gotteshande
Gekommen. Er sey Nichts den Götter'n schuldig: nein,
Er wolle nur dem Gott des Titus dankbar seyn.
Xarung. Siehst du! wie diese Seuch' durch Krieger sich verbreitet?
Xoguns. Was trug sich ferners zu?

Morod. Das Khor der Ponzen streitet
Und treibt, der Kriegsmann soll den Göttern Weihrauch streu'n:
Doch alles war umsonst; die Krieger sprachen: Nein!
Sie griffen nach der Kling' und schimpften alle Götter
Des Landes; tolle Wuth trieb diese Glaubensspötter
So weit, daß sie vielmehr sich wünschen alle Pein,
Als ungetreu dem Gott des Ukondon zu seyn.
Und so ist das Gezänk, das zwischen den Soldaten
Und Ponzen sich erhob, in ein Gelärm gerathen.
Sogar beym Tempel selbst hat die Verwirrung statt;
Es droh't das Ponzenkhor, es wüthet der Soldat.
O Kaiser! setze bald dem Uebel Ziel und Schranken;

Wo nicht, dann könnte wohl dein Thron und Leben wanken.

Vielleicht setz't der Soldat den Titus auf den Thron.

Xoguns. O nein! so lasterhaft dächt' niemals Ukondon;

Er ist vielmehr bedacht, den Aufstand beyzulegen.

Morod. O glaub' nur dieses nicht! er wird ihn mehr bewegen.

Yemond. O Kaiser! der Soldat von deiner Wache fluch't

Und schwör't dem Ukondon und seiner Naterzucht

Den Tod, wenn das Gesetz des Landes nicht von allen,

Wie sonst, gehalten wird.

Xoguns. (Wie unbegreiflich fallen

Mir diese Nachrichten, die mir verdächtig sind!)

Xarung. Und dieses leidest du? – bist du auf einmal blind?

Siehst du die Grösse nicht der dringenden Gefahren?

Kann dich die Heiligkeit der Götter, deiner Schaaren

Und Unterthanen Wohl, kann dich dein eig'nes Heil

Nicht rühren? Sind dir Thron, Gesetz und Leben feil?

Yemond. Es meynet der Soldat, du sey'st dem Khristenglauben

Auch heimlich zugethan und wollest gar erlauben,

Daß – –

Xoguns. Schweig! was redest du? die Wache, die mich deck't,

Glaubt, ich sey von der Lehr' des Titus angesteck't?

Yemond. Der allzu grosse Hang zum Titus, Gunst und Gnaden,

Die er von dir genießt, beförder'n deinen Schaden.

Xoguns. Wenn mich die Hoffnung trügt, wenn Titus seiner Lehr',

Die für Iaponien gefährlich ist, nicht mehr

Entsagen will, soll er, als ein verruchter Spötter

Des Glaubens, als ein Feind des Reiches und der Götter

Heut noch zu grunde geh'n, und mit ihm der Soldat,

Den er zum Khristenthum durch List verführet hat.

Xarung. So, grosser Xogunsam! so sammelst du dir Ehren.

Yemond. So wird dein Beyspiel selbst den Unterthan belehren,

Wie irrig der Verdacht und seine Meynung sey;

So mach'st du deinen Thron von den Gefahren frey;
Morod. Wenn einmal der Soldat den Feldherrn sieht erblassen,
Dann wird er alsogleich das Khristenthum verlassen,
Und auf die Glaubenslehr' des Reich's zurücke geh'n.
Xarung. So wirst du dich beglück't in Xakens Schoosse seh'n.

Dritter Auftritt.

Iakuin. Die Vorigen.

Xoguns. Warum kömmt Iakuin so spät mit dem Berichte
von der Gesandtschaft her?

Iakuin. O Kaiser! im Gesichte

Kannst du erseh'n, daß ich nichts Angenehmes hab.
Ich komme früh genug; denn schöne Tochter gab
Es keine mehr für dich.

Xoguns. Was? Arima, der Flecken,
Will Xogunsamens Wink und Auftrag nicht vollstrecken?

Iakuin. Ein Auflauf in der Stadt erhob sich, da ich kam,
Und sie die Foderung von dem Tribut vernahm.
Ein ungestümmes Heer der Weiber lief zusammen;
Sie fluchten wider mich, sie fiengen zu verdammen
Und zu verwünschen an so eine böse That,
Zu der ein geiler Fürst verboth'ne Neigung hat.

Sie schrieen: Besser ist's mit reinem Leib' erblassen,
Als daß wir unser Kind zur Lust misbrauchen lassen.

Xoguns. (Ey! könnte wohl ein Schimpf, als der ist, grösser seyn?)

Xarung. Siehst du die schöne Frucht vom Khristenthume ein?

Iakuin. Ia! eben dieses ist, was sie so heilig nennen;
Iungfern und Iünglinge, ia Männer selbst bekennen,
es wäre wider Gott die größte Lasterthat,
Wenn eine Iunger sich, die diesen Glauben hat,
Von dir mißbrauchen ließ.

Xoguns. Was? sind dieß Lasterthaten,

Was als ein altes Recht wir Kaiser allzeit hatten?

Du dummes Arima! du sollst mir diese Schmach

Bezahlen! zittere! und fürchte meine Rach'!

Iakuin. Ich konnt' mit harter Müh' des Pöbels Wuth entlaufen;

Ich suchte in der Flucht mein Heil. Ein ganzer Haufen

Der Weiber schloß mich ein, ich konnte kaum entgeh'n

Dem Tode; denn es hieß, Ich soll' mich untersteh'n,

Nur eine einzige von Jungfern anzurühren

Und zum Misbrauche dir, als Kaisern, zuzuführen.

Xoguns. Wie? dieses Volk, ein Wurm der Erde, brüstet sich

So keck und setzt sich verwägen wider mich,

Denn doch die Sonne selbst, den die Gestirne kennen

Und ihren besten Freund und Anverwandten nennen;

Vor dem die ganze Welt sich beugt, mit dem die Schaar'

Der Götter zärtlich thut? Wächst also nur Gefahr

Und Unheil wider mich aus Titens neuer Lehre,

So, daß der Unterthan, was ich mit Recht' begehre,

Als mein Geboth verwirft und selbes boshaft heißt?

Fort, fort mit dieser Seuch', eh selbe weiter reißt!

Es sterbe, wer nicht läßt den Irrwahn dieser Lehre,

Es sey denn, daß er sich zum Xaka wieder kehre!

Xarung. So Kaiser! so wird dein und deines Reiches Glück

Befestiget, so kömmt die Ehre dir zurück,

Die durch das Khristenthum schon ist geschmäler't worden.

Xoguns. Xarunga! nächster Freund der Götter! halt die Horden

Der Ponzien zurück, daß sie den Ukondon

Nicht tödten; weil ich ihn, als ein Rachopfer, schon

Für mich bestimmt hab. Yemondon! geh zum Krieger

Mit Morodonen hin, und forschet, ob der Sieger

Nicht etwa neue List in seinem Busen trägt.

Morod. (Wie süß ist dieses Amt, das mir wird auferleg't!)

Xoguns. Du aber Iakuin! verkünde Ukondonen

Den Tod! setz' auch hinzu, ich werde Keinem schonen,
Die Mutter sammt der Frucht soll mit ihm untergeh'n,
Und zwar nach einer Stund' wird mein Befehl gescheh'n,
Wenn er in dieser Zeit, die wir zur Frist erlauben,
Von seiner falschen Lehr' zu Iapons Lehr' und Glauben
Nicht ernstlich wiederkehr't. Er eil't gerufen her:
Ich gehe; denn er kömmt. Er ist nicht würdig mehr,
Denn Kaiser anzuseh'n. – Dem Obersten der Wache
Bedeute, er soll gleich bey mir seyn im Gemache. (a)⁶
Iakuin. Ich werde den Befehl o Herr! genau vollzieh'n.
Yemond. Freund Iakuin! du kannst durch ferneres Bemüh'n
Des Kaisers Zorn noch mehr entzünden; dir vor allen
Ist er geneig't und glaub't. (b)⁷

Iakuin. Laß nur den Muth nicht fallen!
Ich hab schon wiederum was Neues ausgedacht.

Vierter Auftritt.

Iakuin. Titus Ukondon. Zmikondon. Gomordon.

Iakuin. Mir kömmt doch seltsam für, daß Titus annoch lach't,
Indem er seinen Tod vor Augen sieht. Es blicket
Ein großer Geist aus ihm, der seinen Adel schmückt.
Gomord. Freund! ist der Kaiser weg? sprich, wo er sich befindet?
Iakuin. Ich glaube, im Palast'.

Gomord. Geh also nur geschwind
O Ukondon mit mir zum Kaiser!

Iakuin. Nein! bleib stehen
O Feldherr! laß nur itzt beym Kaiser dich nicht sehen!
Er ist sehr aufgebracht. Im Weggeh'n schuff er mir,
Ich soll dir seinen Zorn entdecken. Nur mit dir

6 (a) Er tritt mit Xarungen ab.

7 (b) Er geht mit Morodonen weg.

Gomordon! säume nicht! will er alleine sprechen.

Zmikond. Nun scheint mir aller Grund der Hoffnung einzubrechen.

Gomord. Welch eine Lästerzung' hat diesen Zorn erweck't?

Xarunga? oder hat sich Morodon erkeck't?

Den tugendhaften Mann durch List zu unterdrücken?

Zmikond. Der Haß des Morodon sieht mit vergallten Blicken

Und neidischem Gemüth' den Sieg des Titus an.

Iakuin. Von beyden keiner ists, der schaden will und kann:

Das Khristenthum allein stürz't Titen ins Verderben.

Titus. Wie glücklich bin ich doch, wenn ich für dieses sterben,

Für dieses leiden kann! – Verlaß Gomordon mich!

Sonst möchte auch der Zorn des Kaisers wider dich

Entbrinnen.

Gomord. Für dein Heil Freund! will ich wachbar sorgen. (a)⁸

Titus. Nun halt mir Iakuin! von diesem Nichts verborgen,

Was dir der Fürst befahl.

Zmikond. (⁹Wie schauer't mir der Geist

Vor Schrecken, der wie Blitz durch March und Glieder reißt!)

Iakuin. Ach Ukondon! verzeih, ich kann mit dir vor Thränen

Nicht reden.

Titus. Dieses wirk't die Zärtlichkeit bey denen,

Die keine Männer sind; du aber bist ein Mann:

Zeig' also mir beherz't des Kaisers Willen an.

Verlang't er meinen Tod?

Iakuin. Nein hast du es errathen,

Und zwar nur eine Stund' will er dir noch gestatten

Zur Denkzeit, ob du dich zur alten Glaubenslehr'

Begeben und hiedurch Gnad, Leben, Glück und Ehr',

8 (a) Er geht eilend weg.

9 Im Original steht die Klammer vor „Zmikond.“. Emendiert im Sinn eines Redeteils, den Zmikond. für sich spricht.

Wie vorhin, haben willst: ist diese Stund verstrichen,
Und bist du nicht zugleich vom Khristenthum' abgewichen,
Dann reißt dich, deine Frau, die Söhne, dein Gesind
Der Tod durch Peinen fort, die unerträglich sind.
Verlaß doch diese Lehr', Freund! weich vom Khristenglauben!
Ach! wie erbarm'st du mir!

Titus. Freund! du wirst mir erlauben,
Daß ich zur Dankbarkeit die Hände küssen darf. --
Iakuin. Nein! ich bin dieser Ehr' nicht würdig. (Ach, wie scharf,
Und wie erschütternd klingt dieß in meinen Ohren!)
Titus. Welch unverdientes Glück ist für mich auserkoren!
O angenehme Post! Es wallet schon das Blut,
Das nur mit Ungeduld in meinen Ader'n ruh't;
Ich will den Meinigen die gute Nachricht sagen,
Die ich vom Kaiser hab'. --

Zmikond. Halt ein! was thust du doch?
Du Unempfindlicher! willst du sammt dir auch noch
Die Söhne, Schwester, mich und Dienerschaft verderben?
Titus. Die Straf' trifft and're nicht, nur Khristen müssen sterben:
Was also zitter'st du, da du unglaublich bist?
Geh! zeig' dem Kaiser an, daß Titus dankbar ist.
Erstatte ihm für mich den Handkuß. Nimm den Degen
Von meiner Seite mit, der um des Kaisers wegen
des Bruders wilden Geist hat aus der Brust gejaht.
Nimm auch das Brustgehäng, das nur die Schultern plag't,
Und lege diesen Schmuck dem Kaiser zu den Füßen;
Er wird für selbigen schon einen Hofherrn wissen,
Der nach der Kriegskunst den Feldherrn machen wird:
Ich habe diese Last schon lang genug geführ't.
Sag', diesen Ehrenschmuck kann Titus nicht mehr tragen,
Der für das Khristenthum will Blut und Leben wagen.
O lang gewünschte Stund! brich endlich einmal an,

Damit mein freyer Geist zu Gott sich schwingen kann!
Ich lasse dir die Welt, den Schmuck, dein Iapon über;
Mir ist der blut'ge Tod, mir ist die Marter lieber.
Wenn du dir nutzen willst, hilf, daß ich sterben soll.
Leb' wohl mein Iakuin! ich gehe freudenvoll.

Fünfter Auftritt.

Zmikondon. Iakuin.

Zmikond. O Schmerz! es zitteret mein ganzes Innegeweide!
Weh mir!

Iakuin. Ich konnte mich der Thränen kaum vor Leide
Enthalten. O wie schwer fällt mir der gähe Fall
des frommen Ukondon!

Zmikond. Wie soll ich dieser Quaal'
Die Schwester, den Gemahl, die Kinder und mein Leben
Entreißen? könntest du nicht einen Rath uns geben?

Iakuin. Ich nicht; denn Titus selber vermehret die Gefahr.

Zmikond. Gesetzt, ich bräch' den Schmuck dem Kaiser selbst dar,
Wär' es nicht rathsam?

Iakuin. Nein! nur Dieses nicht; er wüthet,
Und würde nur noch mehr durch Titens Stolz zerrittet.

Zmikond. Wie bringe ich den Schmuck von mir? er ist nicht mein:
Und Schweigen könnte mir ein Weeg zum Laster seyn.

Iakuin. Ey doch! hast du mein Herz nicht besser eingesehen,
In welchem Titus, du und deine Schwester stehen,
Wie Gold im Erze steckt? – Freund! laß die Sache mir,
Mir über; denn es kann zum Kaiser dießmal dir
Der Zutritt schädlich seyn: gieb mir die Ehrenzeichen!
Ich werde sie getreu dem Kaiser überreichen,
Und für den Ukondon und dich der Redner seyn;
Denn ich muß auf Befehl zum Kaiser itzt hinein,
Und mit Bewunderung von Titens Großmuth sagen:

Ich könnte, wenn du willst, auch Dieses mit mir tragen.

Zmikond. Nimm alles! – Aber sprich! was ich für Titens Wohl,
Und für mein eigenes itzt unternehmen soll?

Iakuin. Nichts; denn ich wüßte dir nichts besseres zu rathen,
Als still und ruhig seyn; das Wetter, das wir hatten
Und wider Titen gieng, war groß und fürchterlich:
So lang sich dieses nicht vernützet, hüte dich!
Kuxanga wird gewiß für seines Feldherrn Leben
Sammt dem gemeinen Mann' sich alle Mühe geben.
Erforsche sein Gemüth; vielleicht fällt diesem bey,
Wie Titens und zugleich dein Heil zu retten sey.

Zmikond. O Freund! so kannst du mich unendlich dir verbinden,
wenn wir getreue Hülff von deiner Hand finden.

Geh nur o werther Freund! und folge meinem Rath'!

Zmikond. Sieh ich gehorche dir. (a)¹⁰

Iakuin. Er glaubet in der That,

Der Thörichte! ich sey dem Ukondon gewogen.

Geh Elender! du bist wie Ukondon betrogen.

Und giebst ihm heute noch Geleitschaft in das Grab.

Vierter Aufzug. (b)¹¹

Die großmüthige Standhaftigkeit Titens Ukondon.

Erster Auftritt.

Titus Ukondon mit seinen khristischen Hausgenossen.

Titus. Gemahlinn! Dienerschaft und Kinder! die ich hab,
Zu ienem Gott geführ't, der in den Himmeln thronet,
Nun ruft er mich und euch zum Streite; er belohnet
Uns mit dem Lorberkranz', der schon geflochten ist

10 (a) Er geht weg.

11 (b) Das Zimmer

Für mein und euer Haupt. Nun zeiget, daß ein Khrist
Die ächte Großmuth hat. Ich muß es zwar gestehen,
Der Kampf ist hart, doch kurz; gedenket nur, wir gehen
In einem Augenwink' aus dieser Welt zu Gott,
Und eine ew'ge Ruh' folg't auf die kurze Noth.

Klara. Gemahl! nur dieses ist mein Wunsch, mit dir zu sterben!
Denn ohne dich zu seyn und dieses erst zu erben,
was du schon wirklich hast, fiel meinem Geiste schwer.

Titus. Was liegt daran, ob ich nach dir, ob ich vorher
Erleiche? Glaub und Treu' wird uns nach wenig Blicken
Im Himmel ungetrenn't mit Lorberzweigen schmücken.
Stirbst du vor mir, dann hilf, daß ich auch standhaft sey:
Und trifft der Vorrang mich, dann stehe ich dir bey.

Marzial. Ach! Aeltern! wenn die Wuth nur euch das Leben raubet,
Und unser'm Blute schon't und freye Luft erlaubt;
Wenn List und Schmäucheley an uns're Sinne setz't,
Und bald mit Reitzungen, bald Schankungen ergät'zt;
Wenn Niemand mehr ein Wort von Gott und unser'm Glauben
Uns vorspricht, und wir uns vielleicht zuviel erlauben,
Als unser Khristenthum geduldet; wenn im Fall',
Daß wir gedränget sind, die Zuflucht überall
Uns abgeschnitten ist, wenn uns kein Khrist mehr stärket,
Kein Beyspiel standhaft mach't und die Natur bemerket,
Wie hart die Todesangst im zarten Alter sey:
O Himmel! was Gefahr, wo Gunst und Tyranny,
Haß und Liebkosungen das Herz zum Wanken bringen,
Und den noch schwachen Geist mit Sinnlichkeit umringen.
Ach Aeltern! stehet uns mit eu'rer Fürbitt' bey!

Matth. Uns, uns gebühr't der Rang. O liebster Vater! sey
So gütig, schicke uns voraus! gieb deinen Söhnen
Den Himmel; du wirst ia ein Bisichen warten können?
Die Erde hatten wir durch dich: nun gieb zugleich

Den Himmel auch dazu, dann sind wir ewig reich.

Laß also uns voraus! laß uns den Tod verspüren,

Damit uns Weichlichkeit und Reitze nicht verführen.

Titus. O Söhne! diese Wahl kömmt nur von Gott allein;

Er theilet Kronen aus. Ihr müsset standhaft seyn,

Alsdann wird sich der Kranz um eur'e Stirne drehen.

Simon. Wie schön, wie artig wird der Blumenkranz doch stehen!

Mir scheint, ich rieche schon die Blumen! Welcher Schein,

Was Schimmer, welch Geruch wird in den Rosen seyn,

Die aus dem Himmel sind, da auch auf dieser Welt

Die Rose lieblich riecht und uns so wohlgefällt!

Titus. Mein Kind! du weist es nicht, und kannst noch nicht begreifen

Die Freuden, die für dich sich in dem Himmel häufen.

Simon. So laß uns einmal geh'n! ist denn die Zeit nicht da?

Ich will im Himmel seyn. (a)¹²

Titus. — Nun ist die Reise nah';

Die Stunde ist vorbey. Nun richtet euch zum Streite!

Klara. O grosser Himmelsgott! mein HErr und Schöpfer! leite

Das Herz, verleih uns Muth und Stärke, gieb uns den

Beruf, daß wir beherzt für dich zur Marter geh'n.

Titus. So Ehgemahlinn! so gefällt mir dein Betragen!

Von Gott kömmt es allein, wenn wir den Blutstreit wagen,

Der uns mit Lorbern zier't; nur seine Güte mach't,

Daß unser freyes Herz bey aller Marter lach't.

O! lasset uns demnach mit kindlichem Vertrauen

Die ganze Zuversicht auf Gottes Güte bauen,

Und ruft ihn mit mir um seinen Beystand an,

Damit für seine Ehr' ein ieder sterben kann.

Ihr Diener! helfet uns vor Gott das Herz ausschütten,

Und ihn um seine Gnad' und seinen Beystand bitten.

12 (a) Titus sieht auf die Uhr.

Zweyter Auftritt.

Gomordon. Die Vorigen.

Gomord. Mich schick't der Kaiser her, Freund! Gnade oder Tod
Dir zu verkündigen. Die Stunde, die dir droh't,
Ist wirklich schon vorbei: Was also wirst du wählen?

Titus. Den Tod.

Gomord. (O hartes Wort! du kannst mich fast entseelen!)

Titus. Ich bin und bleib' ein Khrist! sieh! alle, welche hier
Bey mir sind, sterben auch für's Khristenthum mit mir.

Simon. Ich bin ein Khrist!

Gomord. (Wie kann das Herz bey einem Knaben
So einen Trieb zu Gott, den er nicht kennet, haben?
O! dieses übersteigt sein Alter, Ach! wie schwer
Ist Kaiser! dein Befehl! wie quäl'st du mich so sehr!)
Geliebter Ukondon! verzeih mir mein Verfahren,
Ich muß gehorsam seyn. — Ich muß die Worte sparen;
Weil Schrecken, Furcht und Schmerz in mir zu heftig ist.

Titus. Freund! glaubest du vielleicht, daß du beschwerlich bist.
Mit deiner Nachricht? nein! Sag nur, wer von uns allen
Darf für das Khristenthum das erste Opfer fallen?

Gomord. Ach! die drey Knaben sind dem Tode schon bestimm't:
Doch will der Kaiser sie noch seh'n. Er ist ergrimmt.

Marzial. O Brüder! welches Glück! was Gnade, welch Vergnügen
Für uns! betrachtet nur, wir sind es, die zum Siegen,
Zum ersten Marterkranz' die Gnade Gottes ruft.

Klara. O das Gebett von euch drang durch die Luft.
Zu Gott. O Freudentag! ich muß euch glücklich heißen.
O könnte doch der Tod die Mutter auch mitreißen!

Simon. Mein Vater! laß uns doch zu Gott um Hilfe schreyn.

Titus. Ia! liebstes Kind! Dieß soll die erste Sorge seyn.
Gomordon, werther Freund! Willst du zum Angedenken
Nicht eine kurze Zeit mir und den Meinen schenken?

Erlaube doch, bevor die Kinder von mir geh'n,
den Himmel durch ein Lied um Hilfe anzufleh'n.

Gomord. O Freund! du weißt es ja, ich kann dir nichts versagen:
Sing! – singet! eu'rem Gott ein Loblied vorzutragen;
Ich unterdessen will stumm, wie ein Marmor, seyn,
Und keine Hinterniß euch machen.

Titus. Gott allein,
Der gute Gott ist es, der uns stärk't in dem Ringen:
O! lasset uns demnach zu seiner Ehre singen. (a)¹³

* * *

So, wie der Hirsch läuft schnaubend zu der Brunnenquell',
So wird vor Liebe Gottes mein Herz heiß und schnell.

* * *

Wir brinnen vor Durst, den wahren Gott zu seh'n:
O! wann wird uns endlich doch dieser Tag aufgeh'n?

* * *

Wir seufzen und weinen um dich Tag und Nacht:
Herr! wir suchen dich, auf dich sind wir bedacht.

* * *

Sie spotten: Sag, wo ist, sag, wo ist dein HErr, dein Gott?
Zeige die Gunst und seine Macht in deiner Noth!

* * *

HErr! durch den Schimpf der Welt wird nur mein Durst gemehr't
Da ihre Zung' deinen Namen stolz entehr't.

* * *

O! wie herrlich ist das Haus Gottes! welche Pracht!
Die meiner munteren Seele schon entgegen lach't.

* * *

Warum Seele! bist du traurig? erhebe dich!

13 (a) Die Khristen knien nieder, und singen ein Lied im sechsten Khortone, die
Martyrerkrone zu erlangen.

Hoffe nur auf Gott; der lieb't dich väterlich.

* * *

Wer ist, wie unser Gott? wer, wer kömmt ihm gleich?

Sein Wink erschuff die Welt und das Himmelreich.

* * *

Wenn tausend Stricke uns der Verfolger leg't:

Sie thun Nichts, wenn der HErr für uns Sorge trägt.

* * *

Auf HErr! erwache und nim dich unser an,

Denen dein Blut das Leben und das Heil gewann.

* * *

HErr! gieb uns die Kraft und lehre uns standhaft seyn,

Nach vergoss'nem Blut' laß uns im Himmel ein.

* * *

Grosser Gott! nur dir sey ganz allein die Ehr';

Deine Macht o Gott! stamm't von Ewigkeiten her.

* * *

Gomord. Wie rühret doch mein Herz der schöne Lobgesang!

Titus. Nun Söhne! trettet an den Weeg, der euch zwar bang,

doch ewig glücklich mach't. Seyd nur beherzt im Streite!

Marzial. O Vater! (a)¹⁴ welchen Dank erstatten wir dir heute

Für dieses Gnadenlicht des Glaubens, das von dir

Uns eingeflösset ward? Wie glücklich sind doch wir,

Da wir schon Bürger sind des Himmels! Mit dem Leben

Hast du uns auch das Recht zum Himmelreich gegeben.

Klara. (b)¹⁵ Mein Simon! iag't der Tod dir keinen Schrecken ein?

Simon. O! nicht den mindesten; mein Tod ist ia nur klein;

Er findet ia nicht viel in meinem kleinen Leibe;

14 (a) Er küsset ihm die Hande, welches auch die zween Kleinern thun.

15 (b) Da er die Hande küsset.

Dich aber trifft ein Tod, der grösser ist. Ich bleibe
Frohlockend vor der Thür' des Himmels draußen steh'n.
Und werde eher nicht zu meinen Freuden geh'n,
Bis du o Mutter! kömmt.

Klara. So gehet denn von hinnen,
Ein Leben ohne End durch's Sterben zu gewinnen!
O Söhne! lebet wohl! ihr edles Brüderdrey!

Marzial. Mein Vater! steh uns doch mit deinem Segen bey. (c)¹⁶
Dieß ist die letzte Gnad', um die wir sehnlichst bitten,
O Vater! segne uns, auf daß mit Riesenschritten
Dein tugendhafter Geist mit uns zur Marter geh'.

Titus. Die Gnade und die Kraft des höchsten Gottes steh'
Euch in dem Kampfe bey, damit ihr herzhaft sterbet,
Und durch vergoss'nes Blut den Marterkranz erwerbet.
O HErr! ich schenke dir die Kinder, sey itzt du
Ihr Vater! Führe sie dem Vaterlande zu.

Nun gehet munter fort die Gnade zu ereilen,
Die euch zur Marter ruft; sie leidet kein Verweilen.

Marzial. Gomordon, werther Freund! wo ist der Marterort?
Sieh! wir gehorchen dir und gehen freudig fort.

Gomord. (Wie rühret meinen Geist die Tugend dieser Knaben?)
Der Kaiser will euch noch zum letztenmale haben.

Mätth. Hier sind wir alle drey! thu, was geschehen soll.

Alle drey. O Aeltern! folget nach!

Klar. und Tit. O Söhne!

Alle fünf. Lebet wohl!

Simon. Wie lustig will ich seyn, wenn ich kann Gott umarmen! (a)¹⁷

16 (c) Er knieet mit den anderen Brüdern nieder.

17 (a) Sie werden weggeführt.

Dritter Auftritt.

Titus. Klara. Kuxanga. Die Bedienten.

Klara. Mein mütterliches Herz fühlt Sehnsucht und Erbarmen,
Da meine Kinder sich entfernen; ihre Noth
Trifft mich zugleich: allein sie sterben ia für GOTT.

Titus. Was Gott der HErr uns gab, dieß kann er wieder nehmen,
Und zwar mit beßtem Fug'; denn auch bei allem Grämen
Bleibt er allein der HErr, der Tod und Leben giebt.
Nimmt er das Leben weg, das zeitlich dauert, lieb't
Er uns; warum? er giebt ein ew'ges Leben.

Sein Willen ist gerecht und heilig. Er kann geben
Und nehmen, wie und was er will; ich bin sein Knecht,
mir steht Gehorchen zu. O HErr! du bist gerecht,
Dich bettet Titus an. -- (b)¹⁸ Ich höre Einen klagen
Und laufen. -- Was hast du Kuxanga! mir zu sagen?

Kuxanga. Erlaube mir o Herr! daß ich mit dir allein
darf sprechen.

Titus. Diener! geh't! ich will alleine seyn. (c)¹⁹
Erkläre dich mein Freund! du wirst mein Urtheil tragen,
Daß ich itzt sterben soll. Nicht wahr? -- du darfst es sagen.

Kuxanga. O nein, nur Dieses nicht! Ich suche nicht dein Grab;
Mich schickten der Soldat und deine Freunde ab,
Die nur auf deinen Wink und dein Befehlen lauer'n;
Denn wisse, der Soldat will dich in diesen Mauer'n
Einschließen, nur damit dir Niemand schaden kann,
Und greift, wenn du befiehlest, die Burg des Kaisers an.
Er --

Titus. Schweig! So eine That, die wider Treu und Glauben
Läuft, kann ein ächter Khrist auch Heyden nicht erlauben.

18 (b) Er sieht Kuxangen kommen.

19 (c) Die Bedienten gehen fort.

Welch eine wilde Wuth reißt bei dem Krieger ein,
Daß er sogar ein Feind will seines Kaisers seyn?

Kuxan. Dein Tod, o Feldherr! bringt den Kriegsmann zum Rasen;
Weil du unschuldig bist.

Titus. Man zwingt uns nicht; wir lasen
Uns dieses Urtheil selbst. Ich sterbe, und mein Herr,
Der Kaiser, will es nicht, ihm fällt mein Sterben schwer.
Sag es dem Kriegsmann, er soll sich nicht erkecken,
Die Hande wider den, der herrschet, auszustrecken.
Er würde seinen Feind an Ukondonen seh'n,
Wenn er in dieser Wuth sich boshaft soll vergeh'n.
Sag, er soll sich zuvor mit seinem Feldherrn schlagen;
Der wolle alles Blut für seinen Kaiser wagen.
Erweis Kuxanga! mir noch diese letzte Treu,
Und wache, daß dein Volk nicht ungehorsam sey.
Kuxan. O Feldherr! dein Befehl ist hart! da ich mein Leben
So, wie der Kriegsmann, für dich will freudig geben:
Allein dein Willen hält den meinigen zurück;
Ich muß gehorsam seyn.

Titus. Sieh! dieses kleine Stück,
Dieß Kästchen hab ich dir und anderen Getreuen,
Du kennst sie schon, vermach't; wir müssen uns entzweyen:
Nimm also dieses Pfand der Liebe Freund! zu dir, (a)²⁰
Iedoch mit dieser Pflicht, daß du hierinnfalls mir
Gehorchest und die Treu sammt deinen Kriegerschaaren
Dem Kaiser, deinem Herrn, läßt allzeit wiederfahren.
Kuxan. Ach Sieger! grosser Held! wie quält den Kriegsmann
Und mich dein gäher Sturz, den ich nicht fassen kann
Und nicht verhinder'n darf! – Leb wohl Iaponens Stütze!
Mein Feldherr lebe wohl! Ich mache mir zu nütze

20 (a) Er giebt ihm sein Goldkästchen.

Die Tugend, die du hast und schweige. Held! dein Geist
Preßt mir die Thränen aus. – Herr! meine Seele preiß't
Die Großmuth und ich dank' für – – Ach! ich kanns nicht sagen (a)²¹

Klara. Mein Titus! wird man denn nicht bald um Klaren fragen?

O dörfte ich doch bald bey meinen Kindern seyn,
Die durch des Henkers Schwert vielleicht schon aller Pein
Der Welt entgangen sind!

Titus. Gott hat den Wunsch vernommen;
Yemondon kömmt zu uns, er wird vom Kaiser kommen
Und dir die Todesstraf' ankünden.

Klara. Nur herein!
Ich sterbe gern, ich will bey meinen Söhnen seyn.

Vierter Auftritt.

Yemondon. Die Vorigen.

Yemond. Freund! ich muß leider mich zu einer That bequemen,
Die schwer fällt; denn ich muß dir die Gemahlinn nehmen.

Klara. Hier bin ich, wenn man mich des Glaubens wegen ruft.

Yemond. Ia! dieser stürzt auch die Mutter in die Kruft,
In der die Kinder schon als blasse Leichen liegen.

Klara. Was Trost mein Ukondon! o Freude! o Vergnügen!
Ich kann vor Freude mich kaum fassen.

Titus. Alles Blut
Wall't in den Aderen und dringt wie heiße Glut
Zum Herzen! wenn ich doch bald bey den Söhnen wäre!
Nimm die Gemahlinn fort! (b)²² Doch wisse, ich begehre
Vom Kaiser meinen Tod; die Kinder und auch mein
Gemahl will ohne mich nicht lang im Himmel seyn.

Klara. Freund! Sorge, daß ich bald bey meinen Söhnen wohne.

21 (a) Er geht weinend fort.

22 (b) Er führet ihm die Klara zu.

Titus. Freund! mache, daß ich bald durch meine Marterkrone
Im Himmel bey der Frau und meinen Kindern bin.

Yemond. Wo reißt euch endlich noch der dumme Irrwahn hin?
Kann das unschuld'ge Blut der Kinder nicht erklecken?
Willst du noch Mehrere in Schand und Unglück stecken?

Klara. Schweig Thörichter! du kennst die Gnade Gottes nicht.
Thu, was befohlen ist!

Yemond. (Wie sie so muthig spricht!)

Geh also, folge nur!

Klara. Laß dich zuletzt umfassen
Gemahl und lebe wohl! du wirst bald hin gelangen,
Wo ich bin. Zweifle nicht, ich folge freudig nach. (a)²³

Fünfter Auftritt.

Titus allein. Alsdenn Zmikondon und endlich Gomordon.

Titus. Nun bin ich ganz allein, HErr! rede, deine Sprach'
Versteht mein Herz, das ich nach deinem Willen richte. (b)²⁴
Mein Gott! verwirf mich nicht vor deinem Angesichte!
Verstoß den Vater nicht! und schenk' auch mir die Kron',
Die du den Kindern hast gegeben. Ukondon,
Dein Knecht, HErr! bittet dich um Stärke für die Seele
Der Klara, daß sie nicht aus Furcht des Todes fehle.

Zmikond. Feind, Schwager. Feind ist da! nun muß gefochten seyn,
Sonst stürzen Thron und Macht des Kaisers plötzlich ein:
Hilf also, rette ihn!

Titus. O! dem soll nichts geschehen
Gott wache für das Heil des Kaisers! Mich, mich gehen
Die Feinde an, nur mich trifft ihre Wuth, ich bin
Ihr Opfer, führe mich zu meinen Feinden hin!

23 (a) Klara wird abgeführt.

24 (b) Er knieet nieder.

Zmikond. Denk Schwager! Morodon will sich zum Kaiser machen,
Und hat durch Iakuin die Ponzen --

Titus. Diese wachen

Und lauer'n nur auf mich, nicht auf den Kaiser, nein!
O! diese Aufruhr wird gar bald gehoben seyn;
Ich darf nur ohne Schwert dem Feind' entgegen gehen.

Gomord. Geschwind, geschwind o Held! sonst kann es leicht geschehen,
Daß Morodonens Wuth der Kaiser unterliegt.

Er rückt bewaffnet an, und, wenn mein Aug nicht trügt',
Hat auch so gar von dir den Stab, der dir gebühret.
Sein Schwarm steht vor der Burg, und Fürst Xarunga führt
Die Burger und das Volk mit vielem Lärmen an,
Und Iakuin ist heut der Ponzen Flügelmann.

Yemondon schmiedet List und weis von allen Sachen,
Er trachtet innenher den Hof verwirr't zu machen.
Nicht wider dich, o Freund! ist Morodon ergrimmt,
Nein, auf den Kaiser selbst ist seine Wuth bestimm't.
Zeig' also deine Treu, zeig, daß du Blut und Leben
Auch in Verfolgungen willst für den Kaiser geben.

Titus. Wie kann ich ohne Schwert dem Feinde Einhalt thun?

Zmikond. Glaub, es wird der Soldat, es wird der Pöbel ruh'n,
Wenn dich der Kriegermann nur sieht; nach deinem Winke
Ficht selber; denn ich weis, daß alle Aufruhr sinke,
Wenn du zugegen bist. Nimm diesen Staal von mir, (a)²⁵
Wenn du ihn nöthig hast.

Titus. Mich dünkt, es liege hier

Beym Eingang an der Schwell' ein alter Staal verborgen. (b)²⁶

Zmikond. O Schwager! säume nicht! denn es ist zu besorgen,
Die Wuth des Kriegers greift zu weit, wenn du nicht bist.

25 (a) Er will ihm seinen Säbel geben, aber Titus nimmt ihn nicht.

26 (b) Er suchet einen alten Degen.

Titus. Dieß Schwert ist alt: allein ein ieder Degen ist
zum Fechten gut, wenn man denselben weis zu führen;
Denn Treu und Tugend sieg't, und Untreu muß verlieren.

Gomord. Was aber sollen wir zum Heil' des Kaisers thun?

Titus. Nichts, als die Leibwache ermahnen, daß sie nun
dem Kaiser ihre Treu bezeuge. Dann besetzt
Die Thore in der Burg und haltet unverletztet
Den inneren Palast. Ich aber werde mich
Zu meinen Khristenheer' verfügen, welches ich
Nach meinem Willen weis zu lenken. Auf mein Schaffen
Wird mein Soldat den Feind gewiß nachdrücklich strafen:
Doch aber ist der Feind zu stark, so wird doch sein
Vergoss'nes Blut der Treu' ein wahres Zeugniß seyn.

Gomord. Laß also Zmikondon! uns länger nicht verweilen!
Wir müssen, die Gefahr ist groß, wir müssen eilen.

Zmikond. Wir gehen, auf dein Wort wird alles gut gescheh'n. (a)²⁷

Titus. Ihr sorget in der Burg! ich will zum Krieger geh'n.
O HErr! ich bitte dich, verzeih, ich komm' schon wieder
Um einen Sieg! schlag doch durch mich die Feinde nieder
Und schaff dem Kaiser Ruh! Wenn ich hab dieß gethan,
Dann gieb, daß ich als Khrist für dich auch sterben kann.

Fünfter Aufzug. (b)²⁸ **Der dreyfache Sieg des Titus Ukondon.**

Erster Auftritt.

Xogunsama. Gomordon.

Xoguns. Ruf mir den Ukondon! ich will es noch versuchen,
Und zwar das Letztmal mit Güte; sein Verfluchen

27 (a) Sie gehen weg.

28 (b) Der Saal.

Der Götter, die bey uns anbettungswürdig sind,
Und seine falsche Lehr', die grossen Anhang findt,
Läuft wider das Gesetz, ich kann es nicht mehr dulden:
Und läßt er dieses nicht, misbrauch't er meine Hulden,
Dann muß er auch den Weeg, wie seine Klara geh'n;
Die Kinder sollen auch den Geist des Vaters seh'n!
Gomord. O Kaiser! Ukondon kann nicht so bald erscheinen.
Xoguns. Warum? – Was hinder't ihn?

Gomord. Er arbeitet für deinen
Verfolgten Thron.

Xoguns. Für mich?

Gomord. Für dich.

Xoguns. Ist selber frey?

Sprich! ob er etwann gar bey seinen Kriegern sey?
Gomord. Ia! ich bath ihn darum, ich schuff ihn aus dem Zimmer,
Und Zmikondon half mir, damit dein ungestümmer
Beneider deiner Kron' dich nicht ermorden kann.
Xoguns. Gomordon! was ist dieß? du lasterhafter Mann!
Gehst du Meyneid'ger! so mit mir, mit dem Gesetze
Und mit den Göttern um? Daß dich der Blitz zerfetze! --
Mich Unglückseligen! Nun merke ich zu spät,
Wie Yemondon mir getreu hat zugered't,
Daß meine Wache selbst mir nach dem Leben trachte:
Nun ist der Meyneid kund.

Gomord. Ich bitte dich, verachte
Mein gutes Herz nicht so; ich will dir alles --

Xoguns. Schweig!

Kein Wort mehr boshafter! ich bin itzt selbstn Zeug
Von deiner List. Nun ists kein Wunder, daß die Wache,
Die mich beschützen soll, sich wider mich aufmache,
Indem ihr Oberster mein Feind und Mörder ist.
So nämlich bin ich schön der Sicherheit verg'wiss't,

Wenn mein Beschützer selbst mir nach dem Leben strebet!

Du Mörder! du Barbar, dergleich keiner lebet!

Gomord. Welch falsches Vorurtheil bringt dich zu solcher Wuth?

Gomordon meynet es mit dir o Kaiser! gut. --

Itzt bringt man deinen Feind, der deine Wach' aufhätz'te,

Daß sie sich wider dich und mein Befehlen setz'te.

Sieh! Zmikondon bringt ihn zu dir gefangen her.

Xoguns. Mein Yemondon? was? in Fesseln? O wie sehr

Bestürzt mich sein Leid! -- Wie weit wirst du noch gehen

Meyneidiger? -- Ich muß den Freund gefangen sehen? --

Vollende nur Tyrann an mir die Lasterthat,

Die dein verruchter Geist zusamm geschmiedet hat!

Damit du pralen kannst, das Leben dem gestohlen

Zu haben, dessen Haupt du hättest schützen sollen.

Undankbarer! ergreif dein Schwert und tödte mich!

Gomord. O dieß sey weit von mir! ich sterbe selbst für dich.

Zweyter Auftritt.

Zmikondon. Yemondon. Die Vorigen.

Zmikond. Sieh diesen Böswicht hier o Kayser! der durch Ränke

Und List die Leibeswach' betrog, und seine Schwänke,

Die er gespielet hat, hieß ihm Xarunga gut.

Xoguns. (Wie kann es möglich seyn, daß er was Solches thut?)

Sag Zmikondon! woher kannst du Beweise bringen?

Zmikond. Lies diesen Brief o Herr! es wird dir seltsam klingen,

Was hier Xarungens Hand zu deinem Sturze schrieb.

Ein Kriegsmann fieng ihn auf, und aus getreu'er Lieb'

Gab er das Schreiben mir. Lies nur! du wirst bald sehen, (a)²⁹

Was Yemondon sey.

Gomord. Wie gut ist doch geschehen!

29 (a) Er giebt dem Kaiser den Brief, der ihn öffnet.

Nun bist du überzeug't nach der entdeckten List
Herr! daß Gomordon nicht dein Feind und Mörder ist.

Der Kaiser liest den Brief öffentlich.

Yemondon, lieber Freund! sey auf meinen Wink beflissen,
Mach', daß meinen Hauptbefehl alle Männer Iapons wissen.
Wir vom rein'sten Götterblute ein geword'nes Erdenkind,
Dem die Götter, dem die Sonne, dem der Mond verwandete sind,
Wir gebiethen in der Kraft, die uns Xaka hat gegeben,
Bringet Xogunsamen um, bringet Titen um das Leben.
Beyde spotten uns'rer Götter, beyde hat das Khristenthum
Schon verkätzer't. Ihre Lehren schaden: bringet beyde um.
Wer nur immer das Geboth wird erfüllen, das wir geben
Der wird niemals eine Quaal, niemals einen Tod erleben,
Sondern wird im hohen Alter lebend in den Himmel geh'n.
Dieses haben wir geschworen. So soll unser Will gescheh'n.
Xarunga.

Xoguns. Böser Mann! hast du mich so betrogen?

Nun ist der Häucheley ihr Schleyer abgezogen!

Du Höllenthier!

Yemond. Verzeih! der Glaub ist Schuld daran;

Ich dachte, daß ich so den Göttern dienen kann,

Wenn ich nach dem Befehl' Xarungens mich verhalte.

Xoguns. Du Gleißner! Ey! was doch bey dir der Glauben galte!

Mußt' er der Mantel seyn, der deine Untreu' deckt?

Du Erzbetrüger! – Wie! Was Lärmen? – wer erweckt

Denselben? – Will vielleicht ein neuer Feind einbrechen?

Yemond. (Weh mir! itzt bin ich hin! die Mitverschwornen schwächen

Den Grund der Hoffnung gar, da sie gefangen sind.)

Zmikond. Ein reicher Vogelfang! nun streicht ein guter Wind!

Gomord. Der Meyneid insgemein bau't sich die eig'ne Falle.

Dritter Auftritt.

Morodon. Iakuin. Kuxanga. Die Vorigen.

Kuxanga. Hier stelle ich vor dir o Kaiser! den wir alle
Verehren, diese zween Rebellen; räche dich!

Shoguns. Kuxanga! deine Treu ist edel gegen mich.

Kuxang. Herr! dieses hast du ganz dem Khristenthum' zu danken;
Denn dieses hält das Herz des Unterthans in Schranken.

Sieh! Morodon bestach mit Geld' den Kriegesmann,

Und Iakuin versprach, was er nicht geben kann,

Ein Leben ohne Noth, sein Laster zu erreichen.

Es gieng auch; der Soldat, der nach den Landesgebräuchen

Den Göttern Weihrauch streu't, nahm diesen Auftrag an

Und sünderte sich ab von meinem Kriegesmann';

Er schlug sich zu der Zahl der schändlichen Rebellen,

Und ließ mit Mund und Hand' zur Aufruhr sich bestellen.

Der khristliche Soldat hingegen schickte mich

Zum Titus, daß ich ihm erklärte, wie er sich

In äusserster Gefahr befände. Ia sie bothen

Ihm allen Beystand an; sie murreten und droh'ten

Den Anhang Morodons den Tod. Doch Titus nahm

Den Antrag übel auf, da ich mit diesem kam.

Was? sprach er, der Soldat will meinen Tod verhüten?

O nein, nur dieses nicht! sag nur, ich lass' ihn bitten,

Er soll dem Kaiser stets getreu und dankbar seyn.

Xoguns. (Was Liebe! welche Treu! welch edler Tugendschein,
Den auch Verfolgung, List und Pein nicht können schwächen!)

Kuxang. Freund! haltet, fuhr er fort, dem Kaiser das Versprechen,
Den Eid und eure Pflicht, und weicht niemals ab

Von iener reinen Lehr', die euch der Höchste gab.

Ich starr'te, da er schuff, daß ich dem Kriegesmanne

Dieß unterbringen soll. Bey meinem Schmerz' gewanne

Mein Herz noch diesen Trost, daß er sprach: Lebe wohl!

Xoguns. Wer also rieth ihm ein, daß er entgehen soll?
Gomord. Ich war es, der ihn bath und trieb, dir beyzustehen.
Zmikond. Und dieß o Kaiser! ist nur wegen dir geschehen;
Es suchte Titus nicht die Freyheit: nur dein Heil
Bewog ihn, und für dieß ist ihm sein Leben feil.
Xoguns. Was seh' ich? Morodon! – wie? Zepter, Schmuck und Bande? –
Bekamst du diese Zier von Ukondonens Hande? –
Du schweigst? Das Laster sperr't Verwägner! deinen Mund.
Morod. Dieß mach't dir Iakuin, der abgeschick't war, kund.
Xoguns. Was abgeschick't? von wem? wer, wer hat dieß befohlen?
Sprich Lasterhafter! wer schuff dir den Schmuck abholen?
Iakuin. Der grosse Götterfreund, der Ponzen höchstes Haupt,
Xarunga trug mir auf, ich soll't (Es sey erlaub't)
den schmücken, dessen Treu und Glauben niemals brechen.
Xoguns. Was? will Xarunga so des Kaisers Rechte schwächen?
Morod. Der hat dich abgesetzt und ferners für das Reich
Unwürdig ausgeschrie'n, und warf mich alsogleich
Zum neuen Kaiser auf, wiewohl ich gar nicht wollte,
Damit ich anstatt dir den Glauben schützen sollte.
Xoguns. O der verwäg'ne Pfaff! wie weit vergeht er sich!
Und ihr, ihr boshafte! ihr reichet wider mich
dem Mörder eure Hand'? – Meyneid'ge! dieß Verbrechen
Wird mein gerechter Zorn im vollen Maaße rächen!
Zmikond. Schieb doch o Iakuin! auf den Xarunga nicht
die ganze Last, da dir die Unschuld sehr gebricht;
Du hättest diesen Schmuck nach Ukondonens Wollen,
Und wie du mir versprachst, dem Kaiser bringen sollen:
Du aber brachtest ihn, dem Kaiser nur zum Hohn',
Xarungen heimlich bey. Sieh! ich bin Zeug davon.
Iakuin. Weh uns! ach Morodon! o die verwünschte Stunde,
Die uns das Leben gab! nun tragen wir die Wunde,
die and're treffen soll; uns schlägt die eig'ne List!

Gomord. Nun endlich, schändliche Verräther! endlich ist,
Die Falschheit und der Haß, der in dem Busen steckte,
Am Tage. – Titus kömmt o Kaiser! er erstick'te
Die Aufruhr, sieh! er bringt Xarungen auch mit sich.
Xoguns. O! diese Beute ist sehr angenehm für mich.

Vierter Auftritt.

Titus. Xarunga verwundet in einem Tragsessel. Die Vorigen.

Titus. Nun lebe sorgenfrey o Kaiser! der dir Stricke
Zum Falle hat geleg't, brach selbst sich das Genicke.
Hier sitzt er in dem Blut' und büsset nun die That,
Die wider dich o Herr! sein Stolz versucht hat.

Xoguns. Giebst du dem Kriegesmann', giebst du den Unterthanen
Dieß Beispiel? willst du selbst den Weeg zum Laster bahnen?

Xarung. Warum verlaugn'test du den Glauben?

Xoguns. Wer hat dir

Was solches unterbracht? Den Bösewicht nenne mir,
Der dieß hat ausgestreu't! Die Götter uns'rer Lande
Verehere ich und geb' mein Leben selbst zum Pfande.
Wer hat dieß Fabelwerk vermessen ausgedacht?

Xarung. Zu mir hat's Iakuin und Morodon gebracht.

Weh mir! der Schmerzen wächst. – Der Tod schärft seine Waffen! – –

Treuloser Iakuin! – dich soll der Himmel strafen! – –

O Kaiser! ach verzeih! – ich kann nicht, wie ich soll – –

Der Tod – nimmt mir – die Sprach' – – Ich sterbe, Lebe wohl! (a)³⁰

Xoguns. Bring't aus den Augen fort den Leichnam des Entseelten! (a)³¹

Zum Tit. Durch wessen Staal muß't er die Missetath entgelten?

Titus. Den Thäter weiß ich nicht; denn als Xarunga kam

Und mit den Ponzien den Weeg gerade nahm

30 (a) Er stirbt

31 (a) Der Todte wird weggetragen.

Auf deine Burg, worinn schon Feinde sich befanden,
Bin ich demselbigen mit Kriegern vorgestanden
Und ließ ihn nicht herein; dann gieng der Lärmen an.
Die Ponzen drangen vor: allein mein Kriegesmann
Stund wie ein Felsen da in Gliedern wohl geschlossen,
Und es wurd' beyderseits nicht wenig Blut vergossen;
Es fielen Ponzen und Bürger und von mir
Auch viele. In der Wuth, wo alle Ordnung schier
Zerrissen ward, bekam Xarunga eine Wunde
Und fiel. Auf dieses floh der Ponz zur selber Stunde
Ins Haus des Amida, wo er die Thore schloß,
Damit er nicht dem Schwert' des wilden Kriegers bloß
Soll ausgesetzt seyn. Hier liegt er voll der Sorgen.
Xoguns. Ich will den Ponzen die Strafe nicht lang borgen.
Doch ihr, ihr Böswichte! ihr hättet eine Pein
Verdienet, welche soll dem Laster ähnlich seyn;
Wir sind beleydiget, die Götter sind verachtet,
Und wider das Gesetz hat eu're Wuth getrachtet.
Soldaten! fort, nur fort mit diesem Mordgesind'!
Verräther! ich bin noch im Strafen zu gelind:
Zerschneidet euch den Bauch und schicket eu're Seelen
Den schwarzen Göttern zu, die nach Verdiensten quälen!
Morod. Weh mir!

Yemond. O bitt'rer Tod!

Iakuin. Verschon' doch mir o Herr!

Xoguns. Soldat! verweile nicht! sein Anblick fällt mir schwer.

Morod. So schmiedet mir der Haß mein eigenes Verbrechen.

Yemond. Ich war im Laster gleich, und muß mit dir gleich sterben!

O Meyneid! du mach'st mich auch in der Strafe gleich. (b)³²

Xoguns. Geliebter Ukondon! ich habe itzt das Reich

32 (b) Sie werden von den Soldaten weggeführt.

Zum zweytenmale schon der unverfälschten Treue
und deiner Dapferkeit zu danken: Freund! erfreue
Mich auch zum drittenmal' und bett' die Götter an!
Wenn du das Khristenthum verläßt, dann will und kann
Ich dir mein Kaiserthum mit Recht' zum Erbtheil' geben.
Titus. Herr! ich war dir getreu, ich schlug für dich mein Leben
Schon öfters in die Schanz': nun bilde dir nicht ein,
Daß ich nicht meinem Gott und Herrn getreu soll seyn.
Es soll mir dieser Sieg die Marter nicht verhinder'n:
Nein Kaiser! halt dein Wort, laß mich zu meinen Kindern
Und der Gemahlinn geh'n. Dieß bitte ich allein,
Laß für das Khristenthum auch mich ein Opfer seyn.
Ich will auch dorten seyn, wo meine Kinder thronen,
Die schon im Himelreich' mit ihrer Mutter wohnen.
Xoguns. So sey es! weil du doch willst selbst untermegh'n;
Mein Ukondon! es soll dein Wille gleich gescheh'n! (a)³³
Zmikond. O HErr verweile noch!

Xoguns. Du kannst nichts mehr erbitten.

Zmikond. Ach Schwager! denk, wohin läufst du mit solchen Schritten?
Die Kinder sammt der Frau hast du schon umgebracht:
Hat ihr unschuldig Blut dich noch nicht klug gemach't?
Titus. Glaubst du o Zmikondon! ich habe sie verdorben?
O nein! sie haben sich die Siegeskron' erworben!
Itzt leben sie beglück't und warten nur auf mich.
Gomord. Freund! ach verschone doch dein Blut, ich bitte dich,
Laß für das Khristenthum dein Heldenblut nicht fließen.
Titus. Gomordon! beßter Freund! laß mich mein Blut vergießen;
Es fließt ia für mein Heil, das dir nicht schaden kann.
Den Sieger nanntest du mich oft: was willst du dann
Mich hinder'n, daß ich nicht mich selbst soll besiegen?

33 (a) Er begiebt sich in ein Nebenzimmer.

Gomord. Umsonst! ich richte nichts; sein Herz läßt sich nicht biegen.

Zmikond. Geh also Grausamer! (b)³⁴ ich räche den Verlust
Der Schwester!

Titus. Räche dich! hier, hier ist meine Brust.

Letzter Auftritt.

Xogunsama. Klara. Marzial. Matthäus. Simon. Die Vorigen.

Xoguns. Hier trittet nur hervor! bey euch will Titus leben.

Titus. Was sehe ich? – sie sind lebendig? – – oder schweben
Sie mir im Geiste nur vor Augen?

Klara. Sey gegrüss't

Mein Titus.

Titus. Bleib zurück! du Ungetreue bist

Der Kinder Untergang! ich will von dir Nichts wissen!

Marzial. (O Himmel! was soll ich aus diesen Worten schließen?)
Ist etwann wider uns der Vater aufgebracht?

Klara. Was zweifelst du?

Marzial. Was hat ihn dann so böß gemacht't?

Klara. Dieß weis ich selbstn nicht.

Marzial. Ich will die Hände küssen.

Mein Vater! – –

Titus. Weich zurück!

Marzial. Laß doch die Ursach wissen,
Warum du zornig bist.

Titus. Schweig!

Matth. Vater! sieh mich an!

Und – –

Titus. Geh! ich hasse dich. Nur weit von mir hindan!
Ich kenne dich nicht mehr, Unwürdiger!

Simon. Ich bitte

34 (b) Er zücket das Schwert.

O Vater! sage doch, was dich so sehr zerritte!

Titus. Schweig! keine Syllbe mehr! verderbtes Mutterkind! –

(Was Unmuth! was Verdruß! die so gewaltig sind,

Daß ich's nicht sagen kann.) Heißt dieses standhaft Glauben?

Verführerin! stund Wort und Treue nur auf Schrauben?

Du Wankelmüthige! die, wie ein Wetterhahn,

Nach einem ieden Wind' sich dreh'n und änder'n kann!

Du selbst, als Mutter, reißt die Kinder ins Verderben

Mit dir, Betrügerinn! und hält sie ab vom Sterben? – –

Doch geh! geh nur zu grund! nimm deine Kinder mit

Zur Hölle! weil dein Herz den Lohn des Himmels flieht.

Verräther! gehet nur! der Abgrund steht euch offen.

Ich will allein o Gott! auf deine Gnade hoffen,

Ich will allein für dich zur blut'gen Marter geh'n.

O Kaiser! lebe wohl!

Xoguns. Wohin begiebst dich denn?

Titus. Zur Marter, welche mir der Henker zubereitet.

Xoguns. Bleib da! zu solcher Wuth ist mein Herz nicht verleitet;

Die Dankbarkeit zieht vor, die deine edle Treu'

Um mich verdienet hat. Daß ich besieget sey,

Kann ich o Ukondon! dir länger nicht verhalten;

Ich lasse ungekränk't den Glauben bey dir walten,

Für den du sterben willst; denn die Beständigkeit

Und Tugend, die du hast, ward Meister in dem Streit'.

Wenn du so einen Gott, den ich und du nicht sehen,

Die Treu' so standhaft hält, was wird erst mir geschehen,

Indem du weist, daß ich dein Freund und Schutzherr bin? – –

Nimm also dein Gemahl, nimm deine Kinder hin,

Die Khristen sind, wie du; sie ließen mit Geschenken

Und Drohungen sich nicht zum Götterdienste lenken.

Hier stelle ich Gemahl und Kinder dir zurück:

Verehere deinen Gott, wie sonst; in diesem Stück'

Will ich den Deinigen und dir die Freyheit lassen.
Nun theile ich das Reich mit dir; du sollst es fassen,
Wie dankbar Xogunsam, wie nützlich deine Treu',
Wenn du auch dankbar bist, mir und dem Reiche sey. --
Nimm diesen Brustgeschmuck, der Kaisern nur gebühret, -- (a)³⁵
Hier hast du einen Stab, den nur ein Kaiser führet,
Damit der Unterthan dich, als sein Oberhaupt
Nach mir erkenne. Freund! nun ist es dir erlaubt,
Mit mir vertraut zu seyn. Laß dich von dem umfassen,
Der dich geprüft hat. Du warest nach Verlangen
Auch in Verfolgungen großmüthig und getreu,
Und stundest mir so gar als einem Feinde bey.
Titus. Herr! was soll Dieses seyn? spiel'st du mit deinem Knechte?
Sprich, ob das falsche Glück mir neue Netze flechte?
Setzt mich vielleicht die Gunst o Kaiser! oben an,
Damit Iaponens Haß mich tiefer stürzen kann?
Xoguns. Nein Freund! es ist mir ernst; hier liegt kein Trug verborgen,
Du bist mein Mitregent: sey also ohne Sorgen.
Titus. (Mein höchster Gott und HErr! wenn es dein Willen ist,
Daß ich zu deiner Ehr' noch länger als ein Khrist
Auf Erden leben soll, so will ich annoch leben,
Doch aber iederzeit für dich mein Blut hergeben.)
Für diese höchste Gnad' o Kaiser! danke ich,
Daß du mein Ehegemahl, die Kinder und auch mich
Beym Khristenthume läßt. Für diese grosse Güte
Geb' dir der Himmel Gnad' und Segen. Nun ich biethe
O Kinder! o Gemahl! euch meine Hande dar.
Umfanget mich! weil ihr so standhaft die Gefahr
Besieget hab't, hat sich mein Zorn in zarte Liebe
Verwandelt.

35 (a) Er zieret ihn mit einem kostbaren Flusse [Fließ?] und mit dem Reichsstabe.

Klara. O Gemahl! wie reizend sind die Triebe,
Die du zur Tugend hast!

Simon. Itzt Brüder! können wir
Zum Vater wieder geh'n.

Matth. Wohlan! ich folge dir
Geliebter Marzial! Laß uns die Hande küssen.

Marzial. Ia Brüder! kommet nur, die Freude zu genießen,
Die uns die Gegenwart des Vaters wieder bringt.
O Vater! (a)³⁶ sey gegrüss't;

Zmikond. O Schwester! wallend dringt
Die unverhoffte Freud' vom Herzen in die Glieder.

Gomord. Ich lebe auf das Neu' und fasse mich itzt wieder.

Titus. Wer dem Gesetze folg't und hält dem HErrn die Treu',
Dem steht Gott iederzeit mit seiner Gnade bey.

Gott werde in Allem gepriesen.

**Titens Rede, die er vor dem Spiele aus der fliegenden Wolke an
Seine hochfürstliche Gnaden ec. ec.
den gnädigsten Landsherrn im Namen der Muse machet.**

So, wie die Erde das Licht, den Schmuck, und die Fruchtbarekeit von der
Schimmernder Sonne erhält, die mit den glänzenden Stralen
Finstere Thäler beleb't und schattichte Wälder und Auen
Aus dem traurigen Flor' der nächtlichen Schwärze entwickelt;
So, wie der Helikon schweigt und die schwätzende Zither erstummet,
Wenn der delphische Gott und Fürst der belorberten Muse
Sein entzündendes Aug von Zyrrens Wässer'n abwendet:

36 (a) Er küsset ihm die Hände, welches auch die zween anderen thun.

『キリスト教信仰における不屈の情熱』

So, o gnädigster Fürst und Herr! sitzt unsere Muse
Ohne Schimmer und Reitz, wenn nicht deine Gegenwart ihre
Leyer zum Leben erweckt und ihren Wohnsitz beleuchtet.
So wird die Bühne durch Dich, die sonst für Niemanden redet
Und nur einmal im Jahr' sich öffnet, aufs Neue begeistert,
Dir ein khristliches Spiel für deine Tugend und Grösse
Als ein Opfer der Treu' und kindlichen Liebe zu widmen.
Dein erhabener Geist und allzeit groß denkende Seele
Machen die Muse entzück't und unseren Helikon ernsthaft,
Daß er im tragischen Ton' von Titens khristlichem Eifer
Und unbeweglicher Treu' zum Beyspiele anderer redet.
Gnädigster Fürst, gebiethenter Herr! betrachte den guten
Willen der Muse und bleib derselbigen gnädigst gewogen.

Szenen der japanischen Erstaufführung des Titus-Ukon-Dramas vom 1. 12. 2002 in Hiyoshi-cho (Kyoto-fu, Fumin no mori, minka) nach Textfassung von H.Shimada/N.Ijiri. Bühnenregie: N.Ijiri; Musikleitung: M.Shikata/Y.Ijiri; Gesamtleitung: D.Schauwecker.



Abb. 1: Xarunga (der „geistliche Kaiser“ Japans; D.Sakamoto)



Abb. 2: Titus Ukon (rechts, T.Nagashima) mit seinen Kindern Marzial (Mitte, S.Misaki) und Simon (links, J.Watanabe)